

東察加ニ達スルノ海上ハ我國熟練ノ漁船ヲ以テ航行スルニ十分成功ノ目的アル事、西洋形ノ快捷船十艘ヲ造リ、沿海諸藩ヨリ壯士千人ヲ選ヒテ蝦夷水軍隊ヲ編製スル事、根室ヲ以テ根據トシ、屯田拓地植民ノ業ヲ舉グル事、蝦夷開拓ノ有爲者ヲ招募シ其成功者ヲ勵スニ破格ノ重賞厚祿ヲ以テスル事、蝦夷總督ノ職權ヲ重クシ、大概ノ政務ハ其專決ニ任ス事、オコツク港又ハ東察加ニ屯在スル露兵ハ一處僅ニ三百人ニ過ヤズ、其本國ト往來甚ダ難シ、故ニ此二處ヲ攻略スルニ必勝ノ算アル事、以上數點ナリ。然ルニ惜ムベシ政府ハ一モ其說ヲ用ウルコト能ハズ、志士ヲシテ空シク終ラシメ、膽智絶群ナル近藤重藏ノ如キモ、大ニ其才ヲ利用スルコト能ハザリシ爲ニ、誤テ刑ニ觸ル、ニ至ラシメタルハ亦惜ムベキコトナラズヤ。

露國ノ東南經路ハ駁々トシテ止マズ、嘉永四年(一八〇五年)其探險隊國旗ヲ黑龍江、クエグト岬ニ建テ、其露領タルヲ表示シ、時ノニコライ第一世帝ノ名ヲ取リテ「ニコライフスク」ト稱ス、安政四年(一八五七年)又樺太(露稱「サケリン」)ノ北部ノ備ナキヲ察シ、安政四年(一八五七年)政廳ヲ北岸「ドーエ」ニ設ケ、官吏一人、兵十八人、傳教師一人ヲ派駐ス、是レ露國ガ樺太占領ニ着手ノ始ナリ。 萬延元年(一八六〇年)英佛ノ

聯合兵支那ヲ攻侵スルニ當リ、露國公使支那ノ爲ニ周旋スル所アリシヲ以テ、此ヲ德トシ強迫シ、北京ノ條約ヲ以テ、韃靼東部九十萬三千五百餘方哩ノ大地域ヲ露國ノ所領トス、是ニ於テ露國ハ亞細亞ノ東北部、西比利亞ヲ全領シ、東岸ニ達シテ境土ヲ朝鮮ニ接スルニ至レリ。

樺太ノ交渉ハ延イテ開國ノ後ニ及ビ幕府ハ樺太經界商議ノ爲ニ、外國奉行竹内及ヒ松平(本姓松井)目附京極ノ三人ヲシテ露京ニ赴カシメ、松平石見守ノ用意周到ニシテ、能ク外交官ノ技倆ヲ顯シタルニ拘ラズ、五十度經界ノ談判ニ機ヲ失ヒテヨリ、遂ニ雜居ノ姑息策ヲ取リ、維又新ノ後副島外務卿ノ計畫ニヨリ、樺太北部ヲ我ニ買收スルノ議アリ、露政府モ亦殆ド之ヲ承諾スルノ時機ニ達セシニ、廟議一變ノ爲ニ、遂ニ樺太千島交換ニ實ハ讓與ノ結果トナリタルハ實ニ慨歎スベキコトナラズヤ。 北邊ニ關スル日露及ヒ露清ノ交渉ハ開國起原、并ニ東邦協會報告第十四、第九、第六、日本近代紀事ニ詳ナルヲ以テ之ニ讓リ、茲ニハ其大要ヲ記ス。

〔間宮林藏ノ滿州探檢〕

日本人ノ滿州地方ヲ探檢シタルハ間宮林藏(又倫藏ト書ス)ヲ以テ始トス。古昔遠征ノ事ハ姑ク之ヲ置ク。間宮林藏ハ常陸ノ人、幕府ノ命ヲ受クテ北地ノ事ニ從ヒ、近藤重藏、平山行藏、最上徳内等ト名ヲ等ウス。文化五年(一八〇八年)再ヒ奧蝦夷(樺太以北)巡見ノ命ヲ受ク、單身發途、七月本蝦夷(今ノ北海道)ノ北端宗谷ヨリ出帆シテ樺太ニ至リ、翌年七月樺太ヲ發シ、漁船ヲ以テ滿州大陸ナル黑龍江岸ニ渡リ、^{デレン}ノ柵營ニ到リ、滿州ノ「三姓城」ヨリ派出駐在ノ滿州武官ニ面シテ筆談ヲナシ、留マルヲ數日、其地ノ形勢ヲ探リ得テ、更ニ「キヤ湖」畔ヨリ黑龍江ヲ下リテ海ニ出テ、九月廿八日蝦夷ノ宗谷ニ歸着シ、十一月江戸ニ至リテ復命ス、余曾テ其行路并ニ探檢シタル所ヲ筆記シタル東韃紀行一部ヲ得タリ、甚タ有益ノ編ナルヲ以テ、今其全文ヲ左ニ錄出ス(補註并ニ傍註ハ原文ニナキ所ニシテ追加ニ係ル)。

本蝦夷地、ソイヤヲ發シテ東韃德楞^{デレン}ニ至ル紀行。

文化五年ノ秋再ヒ間宮林藏一人ヲシテ北蝦夷ノ奧地ニ至ラシメラル、其年ノ七

月十三日、本蝦夷地、ソイヤヲ出帆シテ其日、シラヌシニ至ル、此處土着ノ住夷多カラザレバ、從行ノ夷ヲ雇フコト能ハズ、夷船ノ奧地ニ赴ク者アルヲマテ、兎角シテ日數三日逗留シ、同十七日夷船ニ乗組、此處ヲ發シ、日數五日ヲ經テ、同廿三日、トシナイニ至ル、此處亦、シラヌシノ如ク、番屋アリテ番人コレニ居リ、地夷ヲ指揮シ、土着ノ住夷モ亦多キ所ナレバ、則チ番人ヲシテ船子トナスヘキ者ヲ擇ヒ雇フトイヘ、此年ノ夏、初見分ノ時從行セシ夷等返リ來リテ後、奧地異俗ノ夷、姦猾ノ甚シキ、又ハ風土ノ異候、行路ノ難苦ナル事ヲ語り傳ヘケレバ、從ヒ行キタシトイフモノ一人モナシ、彼是シテ日數八日ノ間、此處ニ遲滯シ、種々ノ謀ヲナシテ漸ニ船子六人ヲヤトヒ、八月三日此處ヲ發シ、日數十三日ヲ經テ、同十五日、リヨナイニ泊シタルニ、翌十六日、サンタン夷數十人船六艘ニ乗組、此處ニ來リ、從夷ヲ捕ヘテ、種々ノ謎語妄語ヲ吐キ、奧地ニ至ルコトヲ解セズナド罵リ、且ソノ齋シ行ク所ノ糧酒諸雜器ヲ暴ニ奪ヒ取ラントシケル故、大ニ恐怖シ、言語ニ通セス、實ニ施スヘキ謀ナク、能々從夷ヲ諭シテ、其暴意ニ逆ハザラシメ、其程ヲ量リテ米酒ナド若干分與シ、其心ヲ慰クレバ、漸ニシテ暴ヲ止メ、船ヲ出シテ南方ニ進ミ去リヌ、從夷其始終ヲ觀

察シテ、コレヨリ南方ニ歸リ去ラント言出シ、更ニ奧地ニ進ムヘシトイフモノナ
カリシカバ、林藏苦心スルヲ留ナラズトイヘドモ、從夷ノイフ處實ニ眼前見ル所
ナレバ、其恐怖スルヲ其理ナキニアラズ、サレバトテ、コレヨリ歸リ去ルキハ、何レ
ノ時ニカ奧地ニ至リ得ヘキト、夫ヨリ酒ナド與ヘ、色々ノ惠辭ナトテ吐テ、其心ヲ
慰ケレバ、漸ニ解心シテ從ヒ行クヘシトイフニ至リ、大ニ力ヲ得、和洋ヲ窺フノ間、
日數十一日ニシテ、漸ク風波モ穩ナレバ、同月廿五日此處ヲ出テ、九月三日、トッシヨ
カウニ至リ着スルニ、是ヨリ奧地ハ異俗ノ夷域ニ入ルヲ既ニ深ク、且日ヲ逐テ寒
威増劇ニ赴キ、貯糧モ亦多カラザレバ、從夷頼リニ歸去ラントイフテ、強ユ可ラザ
ル勢ナレバ、止ムヲ得ズトシテ、終ニ船ヲ返シテ、九月十四日、リヨナイニカヘリ
ツキヌ、サルニテモ所志ヲ空クシテ徒ラニ歸去ラントノ遺恨ナレバ、如何ニモシ
テ、海上凍合ノ候ヲマチ、氷上ヲ經歷シテ奧地ニ至ルヘシト思ヒテ、十月廿四日マ
ア、此處ノ酋長、ウトニソト稱スル夷人ノ家ニ寓宿シケルニ、日ヲ逐テ、積雪山ヲナ
ストイヘドモ、海上更ニ凍合セザレバ、如何ニ思フトモ、奧地ニ至ルベキ術ナク、且
日々食糧モ残り少ナニナリ、終ニ雜具ヲ約シテ船ト共ニ、ウトニソトニ托シ置、六夷

ヲ率ヒテ積雪ヲ侵シ、陸行シテ十一月二十六日、トシナイニ返リ至ル、此ヨリコノ
處ノ番屋ニ寓居シテ其歲ヲ越ヘ、巳歲正月廿八日迄此所ニ滞留シ、食料ノ貯ナト
調ヘテ、廿九日此所ヲ出、又奧地ニ向ヒシニ、二月二日、ウシヨロニ至ル、是ヨリ奧地
ハ悉ク滿州附屬ノ夷域ナレバ、初島ノ夷恐怖スル心アルニ、地夷ノ流言スル處、初
島ノ奧地ニ入ル時ハ、往時ヨリ交易ノ諸州ヲ貸置シ贖ノ爲ニ、質トシテ奧地ノ夷
コレヲ捕ヘント言シナド聞及ヒ、且去年、サンタン夷ノ狼籍ヲ思ヒ出シ、從夷等悉
ク恐怖シ、更ニ從ヒ行ヘシトイフモノナシ、故ニ六夷ノウチ悍勇ナル者一人ヲ殘
シ、餘ハ悉ク歸リ去ラシメ、漸ニシテ地夷五人ヲヤトヒ、舟ヲ出シテ、四月九日、ノテ
トノ崎ニ至リシニ、海上猶凍合シテ、舟ヲヤルヲ能ハス、故ニ五月七日迄此所ニ滯
留セシニ、此所「スレ」此所「スレ」、男女凡六十人許、初島俗ノ男女二人アリト云フ、居夷「ウシヨロ」ヨリノ備夷
又是ヨリ奧地ニ入ルヲ憚リケル故、此處ニシテ又一夷ヲヤトヒ、先駟ノ者トナ
シケレバ、從夷皆漸ク心ヲ安シ、船ヲ出スニ及ヒ、サンタン「舟」一艘ヲ借リテ、是ヨ
地ハ湖瀬多シテ初島軟弱ノ舟ヲ以テ進退スル、同八日此處ヲ發シ、同十日「イクタ
マ」ニ至リシニ、從夷又タ往クコトヲ恐ル、ニ依テ、止ムコトヲ得ス、地夷一人

ヲ備フテ先導トナシ、同十二日此所ヲ發シ、其日、「ナニオ」ニ至リ着ス、此所既ニ此島極北ノ地ニシテ夷家僅ニ五六屋アル所ナリ、「ヨリ」此ノ所ニ至ルノ間島ト東麓地トノ相對スル迫峽ニシテ、潮水悉ク南ニ流レ、其間潮路有リトイヘドモ、波濤激沸ノ憂モ少ク、小軟ノ夷船ナレドモ、進退サマテ難キヲナシ、此所ヨリシテ北地ハ北海漸々ニ開ケ、潮水悉ク北ニ注キ、又濤大ニ激起スレバ、船ヲヤルヲ能ハズ、サラバ山ヲ越テ東岸ニ出ントイヘバ、從夷從ヒガヘンゼス、止ムヲ得ズシテ、同十七日船ヲ返シ、同十九日、「ノラト」ニカヘリ至リヌ、然ルニ貯糧既ニ盡キナントスレバ、大抵魚肉草根木實ノミ食シ、其精心ノ堪ヘサルニ至テ、僅ニ一握二握ノ米粥ヲドス、「リ」只不飢ヲ希フノミナレバ、從夷皆惰逸シテ物ノ用ニ堪ヘズ、只慍鬱シテ日々俯臥スルノミナレバ、コレヲ諭シテ漁獵セシムルヲ叶ハズ、サラバ食物ヲ交易シ得テ、コレニ與ヘント欲スレトモ、貯フル所ノ諸鐵物マタ多カラサレハ、如何トモ施スベキ術ナク、此上ハ我一人此所ニ留リ、時ヲ待テ東岸ニ至ルヘシト決シ、六夷ニ返リ去ランヤ否ヲ問フニ、皆去ルヘシト答ケレバ、其言ヲ以テ此所ノ酋長、「「コ」」ニト稱スル者ニ告グシニ、「「コ」」ニ答ヘケルハ、實ニ然ルベキ事ナリ、然レト

モ、「「モ」」ニシバ、「「モ」」稱スル一人此地ニ留ラレ、「「モ」」其意ニ任セ雜キヲアリ、疾病ノ事論ナク、死亡ノ事モ亦ナシトイフヘカラズ、萬一サル事ノ有ラン時ハ必我屬ノ殺害スル所ナリト疑ル、トモ、我屬何ヲ證トシテ本朝ニ陳謝スベキ、願クハ從夷ノ内一二人ヲ留メ置キ、其餘ノ者ヲシテ悉ク返リ去ラシメ、「「モ」」然ルヘシト云ケル、マタ初ヨリ從フ處ノ初島夷人ヲ留メテ、ソノ餘ハ悉ク、「「ウ」」シヨ、「「ニ」」返シ、「「イ」」カニモシテ此島ノ周廻ヲ極メ盡サント此所ニ滞留シ、與地ノ事共時々、「「コ」」ニニ便リテ質問セシニ、魯西亞ノ經界モ此島ヲ去ルヲ遠カラス、時々其屬夷ヲ船ニ乗シ、燈巧ノ火器ヲ持テ、「「オ」」ニテ、「「オ」」此島、「「オ」」地名、「「オ」」海上ニ遊獵スルヲ少カラスト聞キケレバ、猶サテ其經界ヲ究メザランモ、言ヒカヒナキ事ニ思ヒ、幾年此所ニアルトモ、是非、其經界ヲ極ムヘシト決シ、終ニ、「「コ」」ニガ家ニ寓居シ、其業ヲ助ケ、漁獵ヲナシ、木ヲ樵リ、網ヲスキナドシテ在ケルニ、此處ノ夷風殊ニ女ヲ貴ミテ男夷ハ徒ラニ奴僕ノ如クナレハ、常ニ女夷ニ諂ラヒ、專ラ其作業ヲ助ケ、木實草根ヲ取ラントテ出行ク時ハ船ヲ漕キテ其業ヲ共ニシ、或ハ衣服ヲ裂テコレニ與ヘナドス、シカレドモ嫌疑ノ事アル時ハ、男夷マタ妬忌ノ恐アレバ、「「コ」」第一ハ婦女ノ内恐レ避ベキモノ、「「コ」」事々巨

細ニ注意シ、疑ヲサクルノ計ヲナシテ在ケルニ、地夷漸々ニ和シ來テ、ヨク林藏ヲ憐レミ、魚獸ノ肉ナドヲアタヘ、相怪マザルニ至リケレハ、地夷和シ來リテ、後ハ諸物、烟草ノ類ヲ來リ乞フ「甚切ニシ時々東岸ノ地理、東韃魯西亞等ノ境界ノ事ヲ聞クニ、コノ島ハ素ヨリ離島ニテ、接境ノ夷壤ナク、假令ヒ東岸ニ至リ得ルモ、同シク「チロツコ」スメンクル」ノ部落アルノミニシテ、魯西亞ノ境界分明ナルベキコトニ非ス、東韃ニ入りテ其事實ヲ極メタラシハ安カルヘシト聞ヘ、且ハ其他猶此島ノ如ク「チロツコ」スメンク「ル」シルンアイノ「キムスアイノ」サンタン「コルテック」キヤツカラ「イダー」、「キレン」ナド稱スル異俗ノ者幾種トモナク其部落ヲ分テル趣ナレドモ、何國ノ屬夷ナルコトモ分明ナラズ、所謂「デレン」ノ官廳ト稱スル者モ、何者ノ置ク所ニヤ、言語不通ノ夷話ナレバ、詳ニスルコト難ク、其命ナクシテ異域ニ入ルモ、亦國禁ノ恐アリトイヘドモ、皆此島ニ預ル事ノ專務ナルニ、其事ノ蘊奧ヲ探リ盡サスシテ歸リ來ランモ、再見ヲ命セラレシ其詮アルマツク思ヒ、何卒東韃入貢ノ時ニ至テ伴ヒ行ンコトヲ約セント思ヒ、日頃媚ビ置シ女夷等ニ語リテ其事ヲ説カセケレバ、「コトニ」事故ナクウケガフトイヘドモ、彼地ハ風土モ素ヨリ同サカラズ、且林藏カ容貌ノ

異ナルヲ以テ、諸夷コレヲ怪シミ、擲楡嘲弄スベキナレバ、其辛苦ニ堪ヘスシテ死ニ至ランモ計リ難シ、コノ事ハ止ミヌルコソ勝ルベクト教ケレドモ、是非從ヒ行クベシト請ヒケレバ、サラバ幸近キ内、彼地ニ赴クコトナレバ、船ノ事ヲ扶ケテ行ヘシト約シヌ。

此「コト」ニト稱スル者、此所ノ酋長ニシテ、所謂「カイシン」タルモノナリ、性篤實ナル者ニシテ、能ク林藏ヲ憐レミ、東韃ノ往返中多ク此夷ノ扶助ニ預ルトイフ。夫ヨリ書ヲ作り、從夷ニ授ケ、其外是マテ認メ置シ此島ノ事ドモ綴リタル書物ハ悉クコレニ托シ、我萬一彼地ニシテ死亡セシモ、計リ難シ、其時ハ汝コレヲ持歸リテ「シラヌシ」ノ府ニ捧クヘシト命シ置キ、「ノテト」ノ地夷「コト」ニテ首トシテ四人皆男「ウヤクト」ノ夷三人、内男一人、夷一人、女一人、「サント」ノ舟長凡五尺許一艘ニ乗組、六月廿六日「ノテト」ノ崎ヲ發シテ東韃地方ニ赴キシニ、其日風退ヒ惡ク、潮路亦ツヨク起キテ、輕艇ノ夷船コレヲ凌キ行クコト能ハズ、終ニ舟ヲ返シテ「ラツカ」ノ崎ニ至リヌルニ、日々風波アシク、日數五日ノ間此處ニ繫泊ス。

時三伏ノ候トイヘドモ、風殊ニ冷カニ、烟霧日々淫濛トシテ、衣裳ノ濕潤スルコト

雨中ニ簀笠ヲ着ケザルカ如シ。

此處産魚少ナク、滯泊中大抵草實ノミヲ食トス、俗ニイフ者。

漸ク七月二日ニ至リテ、風波穩ナルヲ得テ、船ヲ出ストイヘドモ、烟霧ハ猶空濛トシテ、東西ヲ辨ゼザルニ、洋中ヲ行クノ凡三里半許ユシテ、東麓ノ地方モト、マルト名ケタル崎ヲ見カケ、夫ヨリ地方ニ添テ南流シ、カムカタト稱スル崎ニ至リケルニ、此處潮瀬アリテ、怒濤激沸スルヲ實ニ急河ノ如クナレバ、夷船既ニ堪ヘサラントスルヲ數度アリシニ、漸ク凌ギ行ク、路ノ程凡十町許南ノ方、ロ、カマチト稱スル處ニ至リ、入灣ノ内ニ船ヲ繫ギテ、和潮ヲ待ツノ間、夷等鱈魚ヲ獲テ水煎シ、コレヲ食セシム、草根不滿ノ腹中僅ニ滿ルヲ得タリ、夫ヨリ其日モ西ニ傾ケル頃、漸ク減潮ノ候ニ及ヒ、濤波モ少シク靜ナレバ、其處ヲ出テ一里半許行キ、其夜ハ「アルコエ」ト稱スル處ニ泊シヌ。

往返中ノ泊處何レノ所トイヘドモ、夷家ニ寓スルニアラザレハ、悉ク海濱河岸ニ假屋ヲ造リ、コレニ泊ス、下皆是ニ倣フ。

假屋ノ製樺木皮ヲ以テ屋ヲ掩フ、其骨ハ大抵柳枝ノ直ナルヲ切り來テ地上ニ

建テ、コレヲ造ル、其内ニ只躰居シテ雨露ヲ避ルニ足ルノミナレバ、殊ニ迫隘ナリ、故ニ炊爨ノ事ハ晴雨トモ屋外ニシテコレヲナス、德楞^テ滯泊ノ諸夷モ亦大抵如此ストイフ。

輒弱ノ夷船ナレバ、風波ノ爲ニ破敗セラレムヲ恐レ、毎夜ニ岸上ニ挽キアゲ、往返中一夜モ水上ニ浮繫スルヲナシ。

同三日船ヲ出シテ、トウウシホ^泊ト、エカタムラカローナト稱スル所ニ泊ス、同四日此所ニテ船中ノ雜器殘ラズ取出シ空船トナシ、地上ニ挽キ上ゲナドスルヲノアリテ、其日ハ此所ニテ暮シヌ。

「カムカタ」ヨリ此所ニ至ルノ間、凡六里許ノ海岸、大抵懸岸石磯ノミ多ク、誠ニ出崎アル所ハ悉ク潮路アリテ、渡濤沸涌スルヲ實ニ漣壺ノ如クナレバ、船ヲ寄スベキノ地方稀ニシテ、只上ニツラテタル「ロ、カマチ」^{アルコエ}ムシボ^ノ三所アルノミ、然レモ何レノ所トイヘドモ、人居アルニモアラズ、唯船ヲ繫グニ便リヨク、且ハ産魚モアリテ、食糧ヲ取得ベキ所ナルノミ、其他沙濱モ亦ナキニアラズトイヘトモ、大抵遠淺ニシテ、磯舟ダニモ進退スルヲ難シ。

此所蟬蚊ノ多キヲ誠ニ糖糍ヲ散スガ如シ、人ノ面目手足ニ集リ附キテ厭フ

ニ堪ヘタリ、然レトモ白晝ノ内ノミニシテ、夜陰ニ至レバ其所在ヲ知ラズ。
此邊ヨリ「マンゴ」河ヲ經テ「德楞」ニ至ルノ間其地ハ悉ク塵土ニシテ、樹木ノ繁
茂スルヲ北蝦夷島ノ地味ニ異ル事ナシ、故ニ此下地勢樹木ノ事、異狀アルニ非
レハ、記シ出スコトナシ。

同五日ニハ昨日揚グ置キタル空船ヲ盪挽シ其程二十丁餘モアリケル山路ヲ越
ヘ「ダハマチ」ト稱スル小川ニ至リ、船ヲハ川中ニ浮ベ置キ、歸リ來テ、荷物何クレ
ト負擔シ、夷トトモニ其所ニ運送シ、其日中往返ノミシテ、夕陽ノコロ漸ニ船ニ積
ミ終リケレバ其夜ハ此所ニ泊シヌ。

東韃ノ庸夷ハ論ナシ、其他東南ノ海岸凡四百餘里ノ間ニ住メル諸韃種ノ夷人、
德楞ニ至テ交易スル者ハ、悉ク此所ニ來リテ陸上ニ挽船スルヲ皆此如スルヲ
ナレバ、此所ノ山路ハ街道ノ如シ、且夏月中ハ往返ノ諸夷モ大抵絶ユル間モナ
ク、林藏此處ニ至シ時モ、クヤツカラ朝鮮界キムンアイノナド稱セル夷類ノ夷、
其外ニモ種々ノ夷船八九艘泊在セシ。

滿州夷北蝦夷島ニ至ル時ハ、大抵「マンゴ」河ヲ乘下シテ島ニ達ストイヘドモ、
或ハ此處ニ至テ、前ノ如ク、船ヲ引越シ「カムカタ」ニ至リ、「ラツカ」ニ渡ルヲアリト

イフ。

此處ニテ「チロツコ」滿州地ニ、「キムンアイ」ノ兩夷船夷ニ粟ヲ贈リ與ヘシ故、炊キ
食シテ甚シク美ナルヲ覺ヘシト云フ。

同六日「ダハマチ」ヲ發シテ流ヲ下リケルニ、此川ハ小川ニシテ、所々ニ石瀬多ク、
流下スベカラサル所アレバ、船ヲ下リテ夷ト共ニコレヲ挽クニ、其流水誠ニ清冷
ニシテ、骨ニ徹シ、且蚊ノ多キヲ、ムシホーノ如ク、烟霧マタ濛々トシテ咫尺ヲ辨ズ
ベカラス、漸クニシテ「キチ」湖ノ源ニ出ケレバ、夫ヨリハ水深クシテ碍滯スル所
ナク、ウル、ホトト稱スル所ヲ過ギ、「キチ」湖ニ入リヌ。

此湖水ノ南岸大抵石岸多ク、其廣キ所ニ至テハ、兩岸ノ直徑凡一里許ニシテ、其
中嶼岩ノ類モナク、浩々タル一大湖ナリ、此湖時トシテ水涸レ、或ハ其半ヲ減シ、
又大ニ減ヲテ「キチ」ノ邊ニ至ルヲ有リ、夷等不幸ニシテ、其時ニ當リ、此所ニ至
ル時ハ、泥上ニ船ヲ挽キ、許多ノ艱苦ヲ經テ「マンゴ」河ニ達ストイフ。

其夜ハ湖ノ中央又「ツタ」ラノカタト稱スル所ニテ泊シタルニ、誠ニ冷風ニシテ、
手足ノ凍寒スルヲ本邦ノ嚴寒ノ如シ、同七日マタ湖中ヲ行クヲ凡二里半許ニシ

テ、キチト稱スル所ニ至ル本邦ノ人傳稱スル「キン」即チ「サマタン」夷ノ部落ナリ、
 難地ニ入テ、此所ニシテ初船ヲ上リテ、チオト稱セル滿州通譯ヲ司トレル夷人
 ノ家ニ至リケルニ、主夷ハ他適シテ女夷二人ノミ家ヲ守レリ、一、女夷ハ船裏「ヨシ」ニ
 其倉ヲ借テ一宿セントテ、船中ノ雜具悉ク取運ビスル内、住夷等大ニ林藏ヲ怪ミ、
 漸々擧リ來テ、後ハ數十人集リ何ヤラソ云テ、妄ニ林藏ヲ捕ヘ、外ニ伴ハントスル
 如クナレバ、色々辭スルトイヘドモ、言語ハ通ゼズ、更ニ聞入ル、「ナク」終ニ他夷
 ノ家ニ誘引セラル時、黄昏ノコロナレバ、何カホノクラキ處ニ伴ヒ入レ、天鵝ノ如
 キ蒲團ノ上ニ踞居セシメ、多勢立チツドヒ、妄ニ來テ抱クモノアリ、煩ヲスルモノ
 アリ、懷ヲ探リ手足ヲ弄シ、口ヲ吸ハントスルモノアリ、林藏モ餘リ狼藉ナル事ナ
 ルニ、言語ハ通ゼズ、始終夢ノ如ク覺ヘ居シニ、其内酒肴ヲ備ヘ來リテ、妄ニコレヲ
 強ルトイヘトモ、其心如何トモ計リ難クレバ、其儘ニシテ應接セザリケレバ、一老
 夷來テ林藏カ頭ヲ摸シ、強テ酒ヲ勸メントス、按スルニ如此スル者ハ、蓋シ其心林
族來テ欲スル心ナルヘシ、又大槻玄澤カ聯海異聞ニ止白里地方死スル時ハ、其親
地方ノ禮ヲ吸フノ禮アルヲナ載ス、竊ニ想フニ、林藏カ口ヲ吸ヒ、煩ヲスリシハ、此
地方ノ禮ヲシカル處ヘ船夷、ラルノナルモノ來テ、大ニ衆夷ヲ叱シ、林藏ヲ伴ヒ出

テ、河濱ニ至リ、夷等ニシハ、殺サント謀ルト聞シ故、救ヒ出シヌトイフテ、カノ「チ
 オ」カ倉中ニ返リ寓シヌ。

住夷ノ容貌、北蝦夷島ノ奥地、スメレンクル、夷ニ異ナルヲナシ、然レヒ其言語ハ
 大ニ異ニシテ、辨ズベカラザルモノ多シ、其器械モ亦悉ク滿州ノ物ニシテ、陶器
 ノ類多ク、衣服ハ大抵木綿衣ヲ服ス、故ニ男女ノ容貌何トナク上品ニシテ、瀟灑
 瀟灑ノモノ多シ。

此所戸數凡二十軒アリテ、（部、長、知、者）一人、（部、長、知、者）一人、滿州通譯ヲ司トレルモ
 ノ二人アリテ、衆夷ヨク知レル所ナリ、其居家ノ造法亦、スメレンクル、夷ニ異ナ
 ルヲナシ。

此地ハ往年滿州夷ノ假府ヲ置キシ所ナレドモ、交易ノ事ニヨリテ、庶夷ト鬪争セ
 シ、「有」リシ故、今廢ストイフ。（年、詳、不、詳）
 林藏此地ニ至リシ時ハ、滿州夷來居シテ交易ヲナス、コレニ依テ所々酒宴等ノ
 事之レ有リ、鼓音ナド響キ、大ニカラフト、島ノ中ノ寂寥トシテ人ナキカ如キノ
 類ニアラス。

此所既ニ「マンゴ」河ノ河岸ナリ。

同八日「キチー」ヲ發シテ「マンゴ」河ヲ上リクルニ、烈風ニシテ船ヲヤルベカラス、僅ニ一里餘上流シテ「ガウヌエ」ト稱スル所ニ泊ス、其夜大雨ナリシニ、河邊ニハカッ遠造ノ假屋ナレハ、雨漏リテ一身全ク濕ヒ、終夜寢ルヲ能ハス、此所モ亦「サンタン」夷五六戸ノ部落ナリ。

「マンゴ」河ハ聞キシニモマサル大河ニシテ、其名義モ錯雜スレバ、林藏經ル所、又ハ夷ノ傳説スル處、水道ノ屈曲、河中ノ產物ヲ左ニ合記ス。

渾沌江

此江モト本邦ニキク所ハ「マンゴ」河ト稱セル、是レ山且夷ノ唱ル所ナリ、諸夷山且ヲサシテ「シヤンタ」ト呼ビ、山且夷自稱シテ「マンゴ」トイフ、コノ河則其居地ヲ經海ニ入ルヲ以テ「マンゴ」河ト稱スルナルヘシ、魯西亞其他西洋人ノ如キハ皆是ヲ「サガリイ」「アモル」「アシユル」ト稱セリ、「サガリイ」ハ魯西亞域中ノ地名、此河源其所ニ發スルヲ以テ、コノ稱ヲ設クルナルベシ、滿州夷モ亦此河源ヲサシテ「サガリイ」「アモル」ト稱ス、「アシユル」ハ江モアル、「アシユル」總テ聞ク所ナシ、渾沌水ハ林藏問答ノツイデ、河名ヲ問ヒシ時、滿州夷書シテ答フル處、林藏又此河黑龍江

ノ稱アラシム事ヲ問ヒシニ、黑龍江ハ別流ニシテ、德楞哩名ヨリ與地里程黑龍ノ地方ヲ經テ此河ニ合流スル者ナリト答ヘシトイフ、滿州ノ方言其聲音ノ清濁去入、詳ニ決理シ難シトイヘドモ、カウトオウラト稱スルガ如シ。

此河源魯西亞境界中ヨリ發シテ數百里不詳經、松花江ト合流シ、松花江方名「ソ」稱ス、朝鮮ノ北界ヨリ流レ來テ此河ニ入ル一大河ナリ、其他大小德楞哩名ニ至リ、以上合流其源魯西亞ニ發シ、朝鮮ニ發スルモノ其數ヲシラス、滿州夷ノ是ヨリ凡二十里許ノ間ハ東北流シテ「カタカ」ニ至リ、夫ヨリ正北流スルヲ凡二十三里ニシテ「カルメ」ニ至リ、屈曲シテ東流シ、ボツカ」ノ邊ニ至テ、ホ「ノ」河ト稱スル一大流中ニ發ス、源魯西亞域ト合流シ、廿五六里ヲ經テ、ヒロクイ」ニ至リ、海ニ入ル「テレシ」ヨリ此處ニ至ルノ間、大小ノ合流其數兩岸ノ廣狹ニ至テハ、唯偏岸一通ノ舟行、其詳ヲシルベカラス、行舟中總テ水底ヲ見ル所ナシ、其流水悉ク、カラフト島與地、イクタマクカマイノ間ニ突キ當リテ七分ハ北海ニ流レ、三分ハ南海ニ注ク、悉ク濁水ニシテ遲流ナリトイヘドモ、ダトフベキモノナキ大河ナレバ、風波アラクシテ、軟弱ノ夷船ナド其中流ヲ進退スベキニアラズ、無政ノ夷壤ナレバ、誰坊堤ヲ築ク者モナク、實ニ浩々洋々トシテ、其涯ヲ望ムヘカラズ、其内島嶼洲渚

ノ數々星列ス、其島嶼スベテ柳樹ヲ生スルヲ夥シク、競々トシテ野菜ノ繁茂スル
ガ如ク、實ニ立錐ノ地ナシトイフベシ、故ニ其河岸ノ廣狹猶更ニ詳ニスヲカタシ
且如斯大河ナレバ、時々洪水溢レ來テ河中ノ島嶼流没シ、其在所ヲ失フモノアレ
バ、沙石集リ來テ新ニ大洲ヲ出スヲアリテ、河中ノ形狀四時ニ變革スルヲ少カラ
ズ、故ニ其叢生ノ柳樹大抵一島コトニ其高卑ヲ異ニシ、タトヘバコノ島水没ヲ免
ルヲ五年ナレハ、其柳樹モマタ五年ヲ經、三年ヲ經タルモノハ、三年ノ柳樹ノミア
リテ、高卑アルヲナシ、是ハ漫流變革ノ狀ヲ概知スヘシ、河中産スル所ノ魚物、鮭ニ
類スルモノ、鯛ニ類スルモノ、鯉ノ如クナルモノ、以上三種無名ニシテ本朝不見所
ノモノナリ、鮭白鱗ノモノ本朝ノゴトクニシテ、其肉濃紅ナルモノ、鱒細身ノモノ、
鮫本朝ノ不見所ノモノ一種、鯨白色ナルモノ、林藏見ル處ニシテ、異形ノモノ大抵
此數種ニトママル、コノ地鮭鱒ハ論ナク、多ク雜魚ヲ産ス、又大蚪ヲ産ス、地夷コレ
ヲ得テ眞珠ヲトルトイフ、此地産物アルヲ見聞セス、唯多ク馬腦石アルヲ見ル
トイフ、東韃地方ヨリ我カラフト島ニ來ルモノ、本朝ノ人古ヨリ概シテ「サント
人ト呼ビ、其地方ヲ指シテ「サント」地ト稱ス、山丹、山旦、山韃等ノ字ヲ以テ題名シ

來リシニ、林藏地方ヲ經歷シテ、アマテク諸夷ヲ見ルニ、其習俗各異ニシテ、唯ニ
一種ノモノニアラス、スメレンクルト稱スル者アリ、「シヤンタ」ト名付ルモノア
リ、コレラツク「ト呼フ者有リ、其俗各地境アリテ、其部落ヲ分テリ、「サント」ハ則
「シヤンタ」ノ訛音ニシテ、一部落ナル時ハ、地方ノ名トナスベキモノニアラス、「サ
ント」ハ自稱シテ「マンゴ」トイヒ、韃地ノ諸夷種ヲサシテ「シヤンタ」ト呼ブ、
「サント」ハ「シヤンタ」ノ音ヲ訛轉シテ、我カラフト島夷ノ唱ル所ナリ。

同九日此所ヲ出テ、凡五里許モ上流シケルニ、亦烈風船ヲ拒ミ、漸ク日暮レテ後岩
屋ニ船ヲ繫キ、假屋ヲ營ミ泊シケル、故、其地名ヲ問フニ、「コレベ」ト名ツクタル夷
五六ノ部落ナリト答フ、同十日又船ヲ出シテ二里餘上流シ、「シヤレ」ト稱セル所
ニ至リ、船夷「コ」トトモニ上岸シテ、此所ノ酋長ハ「ラタ」夷名ノ家ニ至リシニ、米
梁ノ混粥ヲ造リ饗慰セシ故、辭歸ノトキニ當テ、鑪一挺ヲ出シテ其厚意ヲ謝スル
ニ、主夷コレヲ受ルノミニシテ、更ニ悅フノ色ナシ、又佗ノ齋ス所ヲ問ハズ、凡夷落
毎ニ、齋シ來ル處ノ物ヲ問フ、甚切ニシテ、各食物ヲ持テ來テ與フヘシ、某ニハ
來ルモノナシトイヘバ、後來再ヒ來ル事アラハ何物ヲ持テ來テ與フヘシ、某ニハ
何品ヲ齋シテ送ルヘシト約セザルモノナシ、此ハ夫ヨリ又船ヲ出シテ二里半許
ヲ去リ、夷ノ如キモノハ往返ノ長途中、只壹人ノミ

モ漕ギ上リ、ウルグー^{トイ}フ所ニ至リシニ、此所ヨリ、コルテツク^ト名ツケタル異族夷ノ部落ナリ、船夷船ヲ買フノ事アリテ其日ハ此所ニ滯泊ス。

地夷ノ容貌、理髮、ソノ他衣服、器械、居家ニ至ルマデ、サンタン^夷ニ異ナルヲナシ、其言語ハ少シ異アリトイヘドモ、一日滯泊中其詳ナルコトヲシラズ。

此夷種總テ五葉松ノ大材ヲ以テ船ヲ造ル事ヲ業トス、南方諸夷ノ用ユル處、皆此地ノ造リ出ス所ナリ、故ニ船夷此所ニ至リ、齋^シ行ク所ノ獸皮ヲ以テ船一艘ヲ易ヘ得、コレヨリ諸雜器ヲ二艘ニ分チ積ミテ德楞^ニ赴ク。

此邊ヨリ與地ハ草木ノ形狀、北蝦夷地與地、サンタン^地ノゴトキニアラズ、青々蒼々トシテ繁茂シ、南方諸夷壤ニ見ザル大材ヲ産セリ、其氣候、モ少シ温暖ナルヲ覺ユ、天度ニサマデ隔絶ナクシテ、カ、ル事ノ有リタルハ怪ムヘキ事ナルヘシ。

地夷ノウチ、滿州夷ノゴトク、剃頭ノモノアルヲ見ルトイヘドモ、其住夷ナルヤ否ヲシラス。

同十一日、ウルグー^{トイ}ヲ出テ、凡四里許モ上流シケルニ、德楞^ニ至リ着ス、コレ滿州假府ノアル所ナリ、船夷^{シヤモ}ヲ伴ヒ來リタリト訴ヘクレバ、滿州ノ官吏等泊宿シ

在リケル廬船ニ伴ヒ來ルヘシト令シケル故、船夷船ヲ進メテ廬船ノ側ニ至リシマ、直ニ廬船ニ移リ乘リ、官吏ノ傍ニ至リシニ、官吏衣服ヲ改メ應接ス、其事終リテ後、厨房ノ處ニ踞居セシニ、衆夷等マタ大ニ林藏ヲ怪シミ群リ來リテ、林藏ヲ弄スル^ヲキチ^ニ倍セシナリ、其後滿州夷自ラ乘ル處ノ船中ニ滯留スベキヨシヲ令ストイヘ、船夷等コレヲ許サレハ、遂ニ船夷ノ假屋中ニ雜居セシニ、集居ノ夷日々假屋ニ來テ、林藏ヲアヤシミ笑フ^ヲ喧嘩ナリケレバ、滿州夷時々來テコレヲ制シ、夜中マタコノ假屋ノミヲ巡見セシトイフ。

滿州假府

此假府前ハ、マンゴ^河ニ臨ミ、後ハ濶遠ナル曠野ヲウケ、樹木蒼鬱トシテ、實ニ其サマヲナシタル土地ナリ、其河岸ハ中流ノ上下ニ島嶼アリテ、コレヲ抱クベ、浩々タル大河ナレドモ風波ノ憂モナク、^{マンゴ}河^{此處ニ至}實ニ穩ナル泊岸ナリ、コノ地土着ノ住夷トテハナク、府外ハ何國トモナク集リ來レル夷等ノ營ミ造リタル假屋、幾十百トナク、樺木皮ヲ以テ屋ヲオホヒタルモノ累々タリ、ソノ集夷、西ハ朝鮮界ニ發シ、東ハ魯西亞ノ境域ヨリ來リ、諸品ヲ交易スルノ間、大抵五六日留滯シテ歸リ去ルモノ、林藏至リシコロ猶五六百人留在ス。

〔間宮林藏ノ滿州探險〕

其府ノ形狀凡十四五間四方ニ丸太木ヲ以テ柵ヲ二重ニ施シ其内ハ左右後ノ三方ニ交易所ヲ設ク其中央又一重ノ柵ヲ施シ其中ニ假府ヲ設ケテ其貢物ヲ受ク賞賜ヲ下ス處トナス柵毎ニ唯一門ヲ設ケ他ニ出入ノ門戸ナシ柵ノ製大ニ粗ニシテ其木長短ノキヲヒナク只穴ヲ穿テ貫柵ヲ通シタルノミニシテ更ニ削磨ノコトナク工匠ノ製セシモノニアラサルニ似タリ。

假府其他交易處モ亦悉ク粗製ニシテ醜穢ナルヲ夷家ニ越エタリ樺木皮ヲ以テ其屋ヲ覆ヒ其四壁亦木皮ヲ綴テコレヲフサキ割板ヲ以テ床ヲ設ク。

官吏ト稱スル者ハ此處ヨリ里程不ヲ隔タル「イチヤホツト」ト稱スル所ノモノニシテ夏月毎ニ松花江ヲ下リ官夷林藏ニ與ヘシ書「マンゴ」河ニ達シ六月中旬頃コノ處ニ來リ中ニ越年スルモノアル趣ニアラス。初秋ノ末中秋ノ初既ニ府ヲ閉ヂテ歸リ去ルトイフ總ヲ府中ニ越年スルモノアル趣ニアラス。

上官夷三人有之其他五六十人許中以下ノ官夷アリサレモ下官夷ノ如キハ「サ人ゴト」ニ名刺ヲ書シテ林藏ニ與シマ、摸寫シテ其一ヲコ、ニ出ス、ルヲ得ス。

長八寸許

分六五寸三橫

大清國

正 白旗滿州委署筆帖式魯姓名伏勒恒河

此處ニ二行ニ滿字ヲ題ス、如キモノナレハ是ヲ省ク、版圖ノ設行スルカ

此他一人ハ廂紅旗六品官驍騎校獎賞蓋領萬姓名撥勒渾河ト書シ其餘ノ書法總テ異ナルヲナシ今一人ハ現任官職正紅旗滿州世襲佐領舒舒名掘精河ト書シ大清國ノ下ニ天朝ノ二字ヲ加ヘ題ス其書式ノコトキハ皆異ナルヲナシ。

官夷大抵日毎ニ假府ヲ出テ諸夷ノ貢物ヲウケ晚ニ廬船ニ歸リテ憩宿ス故ニ日暮レバ柵門ヲ閉ヂ内ニハ下官夷ノミ交易所ニ宿直シテ其日ノ事ヲ理ス夜中スベテ油煙火ヲ用ヒス燭火ノミヲ用ユトイフ。

上官夷三人相應接スルノ狀ハ素ヨリ論ナク中以下ノ官夷ヲ待スルノサマ、又中以下ノ官夷其指揮ニ從ヒソノ事ヲ行フヲ見ルニ貴賤ノ禮ナキニアラズトイヘドモサシテ恭敬ヲ盡ス「トモナク飲食ノ類モ亦上下ノ分ナキガ如ク、毎事相助ク相成スハ趣實ニ相和シテ一家ノモノハ、コトシ。

凡此處ニ來リ集リタル諸夷船ヲ河岸ニ繫キ終レバ直ニ其船ノ長タルモノ一

〔開宮林藏ノ滿州探檢〕

官夷ノ船ニ至リ、笠ヲ脱キテ官夷ニ向ヒ、低頭スルヲ三次ス、是亦來船ノ事ヲ訴
 フルナルベシ、其後官夷酒ヲ出シテ其夷ニ飲シメ、精粟三四合ヲ出シテコレニ
 與フ、是レ一ノ禮ナリ。
 進貢ノ禮ハ下官夷柵門ニ出テ、諸夷ノ「ハラタ」(部長ノ部ナリ)、「カインタ」(部長ニ次ク)ノ類一人ツ、ヲ呼出
 シテ假府ニ至ル、上官夷三人府中ニ卓子三局ヲ設ケ、コレニ腰ヲカケテ其貢物
 ヲウケ、諸夷ハ笠ヲヌイテ地上ニ跪キ、低頭スルヲ三次シ、終テ其貢物、黑貂皮一
 枚「夷名」ホイス、筒拔シタル皮ナリ、ハラタニカテ奉ル、中官夷紹介シテ上官夷ノ前
 ニ呈ス、貢禮終リテ後賞賜ノモノヲ下シ與フ、其品ハラタニ與フルモノハ錦一
 卷長七、カインタハ純子ノコトキモノ四尋庶夷ニ至リテハ木綿四反下品、櫛針、
 鎖、袂、紅絹三尺許ヲ下シ與フ。
 以上ノ禮アルノミニシテ、其他路上相逢ノ禮、或ハ中以下ノ官夷ヨリ贈物ヲウ
 クルトイヘトモ、謝辭ノ禮ナドイフ事モナク、マダ上官夷、中官夷トモニ府中ニ
 出入スルヲ見ルニ、從者トイフモノモナク、唯一人ニシテ扇子ヲ持チ、群夷騷擾
 ノ中往返ス、故ニ諸夷往々其肩腰ニ觸レ、衣裳ヲ汚スト少カラストイヘトモ、制
 スルヲナク、諸夷亦恐怖スル色ナシ、中以下ノ官夷ハ猶サラニ諸夷ト馴昵シ、其
 相語レルヲ見ルニ、草間ニ並臥シテ交易ヲハカリ、或ハ煙草ヲ含ミナガラニシ

テ諸夷ト並ヒ府外ヲ往返シ、諸夷ノ假屋中ニ至テ飲食ヲトモニシ、或ハ夷中ノ
 少年ヲ捕ヘテ嬉戲ヲナドスルサマ、イカニモ親厚ニシテ、更ニ恭敬ヲ以テ諸夷
 ヲ責ムル事ヲ見ス。
 諸夷相共ニ應接スル處ノ禮一モ見決ムル處ナクレバ、其有否ヲシラズ、林藏ニ
 對シテハ時々跪拜スルモノ有リシトイフ。
 交易ノ事ハ亂雜ニシテ更ニ一定ノ式ナク、交易所ト夷假屋ト相トモニ往返シ
 テ交易ヲナス、其他道傍街上トイヘトモ交易スル事ニシテ其所ヲ論スル事ナ
 シ。

其交易ノ態、諸夷種々ノ獸皮ヲ腋下ニ狹ミ、交易處ニ至リ、吾欲スル所ノ物、酒、煙
 草、布帛、錢物ノ類、思フサマニ易ヘ來リテ後、餘ス所ノ皮アル時ハ、其價ヲ貪
 リテ妄ニ交易セス、滿洲夷ハコレヲ取ント欲シテ色々ノ品物ヲ出シ示シ、猶交
 易セサル時ハ、己カ着服ヲ脱シ交易スルニ至ル、其亂雜無類ノ事コレヲ以テ概
 知スヘシ。

諸方ノ夷幾百人トナク、日々假府中ニ亂入シ、交易ヲナス事ナレハ、其喧嘩ナル
 一瞥フニ物ナシ、或ハ佗夷ノ獸皮ヲ奪ヒ去ルモノ有リト罵リ、又ハ我腋下ノ皮
 末ヲ裁去リシト呼ヒ、其價ヲ貪ル夷アル時ハ、着物ヲ脱シテ猶其皮ヲ得サル官

夷アリ、或ハ相共ニ打擲シ、又ハ獨走リテ轉倒シ、布帛ヲ得テ出ルモノ有レハ、木綿ヲカエシテ酒ヲ得ント呼フ夷有リ、其間撞木ヲ打テ其喧嘩ヲイマシメントスレハ、官物ヲ盜ミタル者アリトテ、銅鑼ヲ打鳴シ、柵門ヲ閉ヂントスレバ、柵ヲ攀ヂテ屋ニ登リ、賊ニ叫牒ニシテ、其事狀ヲ辨知シ難シ。

柵中何レノ處ニヤ鐘樓ヲ設ク置キテ、一日中コレヲ撞鳴シ、ヤム時ナシ、煩雜喧嘩ノ内、林藏其所在ヲ詳セス。

喧嘩嘈擾上ノコトシトイヘドモ、官夷強テコレヲ制スル事ナシ、シカレトモ其進貢ノ禮、又ハ下令ノ式ノ如キニ至テハ、官夷ハ論ナク、庶夷トイヘドモ、大ニ肅慎敬畏ストイフ。

下令ノ事、何ニテモ急速ニシテ、優寬ノ事ヲ見ズ、中官夷跪テ令ヲ受ルニ、僅ニ一二辭ヲ接スレバ、忽チ立テ其事ヲ行フ、實ニ手ヲ反スガ如シ、林藏在留中、何夷ニテヤ有リクン夷ノ如シ且犯法ノ事有リシ趣ニテ、上官夷令ヲ傳ヘテ、下官ヲシテ是ヲ鞭打シム、大ニ疼痛シテ叫號涕泣ス、シカレモ其後府ノ出入ヲ禁スルナドイフ事モナク、打テ終テ後ハ更ラニ舊惡ヲ責メス。

官人ノ廬船横一丈餘、長サ凡七八間ニシテ、舳ニ見ヨシト稱スヘキモノモナク、只兩方ヨリ板ヲ付タルノミニシテ、板ノ合セ目ハ悉ク白土ヲ以テコレヲ塗り、

船三分ノ二ヲ荷箇ノ處トナシ、芦ノ簾條ヲ以テ其上ヲオホヒ、其一方ニ小板屋ヲ造リ、官夷ノ居所ヲナシ、艦ノ方ニ樺木皮ヲ以テ假庇ヲ作り、厨房トナス、厨房ハ賊ニ在留中假ニ設ル所ニシテ、官夷三姓ニ歸リ赴ク時ハ、悉ク毀敗シテ、コレヲ去ルトイフ、如斯船四艘此所ニ泊在セシニ、内二艘ハ板屋ヲ設クス、且樺木皮ヲ以テ庇ヲ設クルノミ。

廬船ハ二艘トモ官夷ノ居船ニシテ、床ヲ設ク、窓ヲ開キ、几卓ヲ置キ、床上木綿ヲ敷ク、官夷其中ニアル時ハ人毎ニ獸皮ヲシキテ踞居ス。

官夷ノ用ル處、諸雜器總テ異形ノ物ヲ見ス、筆硯、飲食ノ具、皆年年崎陽ニ渡來スルモノ。

兵杖ノ類總テ齋シ來ルモノヲ見ス、唯鳥銃一挺有之、下官夷コレヲ弄スルヲ見ルノミ、紙製ノ炮器ナリトテ、時々河中鳴喚ノ中ニ往テ放發ノ音アルヲ聞キシカド其製ヲ見ズ。

官夷ノ衣服、大抵縹子、純子ノ類ヲツク、雨中ノ時紺羅紗ノ衣ヲ服ス、冠ハ藤ヲ以テ造レル笠ノ上ニ紅糸ヲカク、金丸ヲ頂上ニ飾ル。

中官夷已下ハ大抵木綿衣ヲ着シ、下官夷ニ至テハ夷トヒトシク獸魚皮ヲ服スル者アリ。

林藏官夷ト應接セシニ、官夷等大ニ是ヲ悦ビ、酒方名、アルカト肴豚肉、鵝肉、同卵、ノ類ヲ肴トス、一種素麵ノ如クニシテ白微ヲシハミミ饗セシト云フ。
 林藏コノ地在留中、滿朝官夷、拖精河ナルモノ、七月十五日此所ヲ發シテ三姓ヘ歸リ去リシニ、其離別ノ禮大ニ異狀ノ事ヲ見ル、凡送別ニ出タルモノハ上下ノ隔ナク、拖精河一人毎ニコレテ抱キ、林藏カ前ニ至テモ亦抱カントセシテ吾邦ハ禮シカラスト答テコレヲ辭シクレバ、腰ヲ屈スルノミニエシテヤミ、又其後舟ニ乗シ去ルトイフ。
 拖精河乘ル處ノ舟山且船ニ異ナルヲナシ、蘆葦屋中ヲ拖精河ノ居所トナシ、ソノ舳ニ車拐三偶ヲ設ク、三夷コレヲ漕ギ、一夷艦ニ在テ楫ヲ擁ス、船中積ム處ノ諸雜器總テ省略シテ遠途ニ赴ク舟ノ如クナラス。
 林藏問答ノ次、此假府ノ名ヲ問フニ、官夷德楞哩名ノ四字ヲ書シテコレヲ與フトイフ。此他筆語問答ノ事件、多クアリトイハス。
 滿夷ナス處ノ事ハ、總テ敏速ニシテ、少シモ持重ノ事ナク、三上官會議シテ其事ヲ行フナドイフ事モ見聞スル處ナシ、大抵各意ニ任セ、其事ヲ行フ様ナリ、交易等ノ事ニ至テハ、猶更上官夷ハシラザル事ノ如シ、中以下ノ官夷等隨意ニコレテナシ、其態ハ上ニ載ル如ク著衣ヲ脱シテ交易スルニ至ル、其情ノ無厭ナルヲ

見ツベシ、又中國ノ外ハ萬國悉ク無政ノ夷狄ナリト蔑視シテ、林藏カ文字ヲ書ケルヲ見テ大ニ之ヲ怪ミ、中國ノ人ナルヘシトイヒ、又ハ日本國入貢ノ事アリヤト問ヒ、林藏崎陽互市ノ事ノミ有之、入貢ノ事ナシト答ヘケレハ、天地間中國ニ入貢セザルモノ僅ニ三國ヲ餘ストイヒ、或ハ魯西亞ヲ屬國ト稱シテ國ノ境界ヲイハズトイフ。故ニ諸夷ヲ待スルノ狀實ニ物ノ數トモ思ハヌサマニシテ、含容浩大ナルヲツトム、驕傲ノ甚キ、彼無厭ノ心ヲ以テ此含容浩大ヲナスモノ、其情態ノ向フ處概知スヘシ。

〔補註〕此時露國既ニ西比利亞ノ半ヲ併吞シ、清朝ノ東韃ニ對スルノ勢力大ニ衰フト雖モ、未ダ全ク威權ヲ失ハズ、北蝦夷即チ樺太島北部及ヒ西部ノ民族亦往々貢物ヲ、アレシノ柵營ニ納レタリ、是ハ凡ソ六十年前乾隆ノ初年、滿州ノ黑龍江將軍ガ北部巡檢ノ際、樺太ニ至リ、恩威ヲ示シ、賞罰ヲ行ヒテ、土人ヲ撫馭シ、各部ノ長等ヲ定メテ年々入貢ノ事ヲ約シタルニ由ル。入貢ノ規定ハ貂皮一枚ヲ貢納セシメ、其賞トシテ錦、純子等ヲ與フ、故ニ各部爭フテ入貢ス、從屬ヲ悅服セシムルニ物ヲ惜マズ、流石ニ大國ノ規模アルヲ察スベシ。往時日本ニ於テ「蝦夷錦」ト稱シテ珍重シタルハ、即チ樺太西北部ノ民族ガ此貢納ノ賞トシテ滿官ヨリ受ケタ

〔開宮林藏ノ滿州探檢〕

ル支那錦ニシテ、同國江南、四川邊ノ所製ナルベシ。貢納ノ規程ハ最初
毎年ナリシモ、清廷ノ勢威稍ヤ衰弛スルニ及ンテ、三年一貢トナリ、又四
年一貢トナリ、間宮ノ入韃ノ時ハ五年乃至六年一貢トナリシト云フ。
此等ノ事狀ハ固ヨリ、總テ樺太以北ニ關スル事ハ從前茫トシテ知レザ
リシニ、是ニ至リテ始テ稍ヤ分明トナレリ。

此處留滯スルヲ日數七日ヲ經ヌレバ、同船ノ夷等進貢交易トモニ終リ、荷物コト
コトク船ニ積入レ、歸島セントテ、本月十七日ニ舟ヲ浮ベケレバ、林藏廬船ニ至テ
別テ告グシニ、官夷等粟酒若干ヲ送リテ別テ餞シ、終ニ相辭シテ船ヲ出シ、流レニ
添フテ下ケルニ、此日風ハゲシク起リテ波濤アラク、其程漸ク六里許モ下リテ、マ
ヤレイニ泊シ、船ヲ岸上ニ上ケタリ。

歸船ノ繫泊亦夷家ニ寓スルニアラサレハ、皆河岸ノ露宿ナルニ、齋ス所ノ樺皮
魚皮ノ類ハ皆荷箇ノ上ヲ覆ヒタレハ、假屋ヲ造ルヲ能ハズ、故ニ林藏薦一枚ヲ
貯ヘテ雨中ノ具ヲナストイフ、夕餉炊ガントテ其用意シケルカ、黄昏ノコロヨ
リシテ純白ノ小蝶夥シク襲ヒ來リ、物色ヲ辨スベカラサルニ至リ、霏々トシテ
釜中ニ飛入ルモノ幾百ヲ、以テ數ヘ難シ、初ノ程ハコレヲ防ギケレトモ、後ニハ

防クベカラサルニ至リケレハ、打捨テ置テ、炊キ終リ、コレヲ見ルニ、釜ニ溢ルハ
マデニ死シテアリ、有毒ノ事モ恐シケレハ、不食シテヤムヘキ事ナラテバ、其上
ナル粟ヲ取捨テ、釜底ノ所ノミ少許ヲ分食シテ、其夜ヲ明セシトソ。

同十八日ノ朝船ヲ出シテ、其日十三四里ヲ乗下シ、先ニ宿リシ「キチ」ニテ歸リツ
キケレバ、又「チオ」ガ家ニ至リ、倉ヲ借リテ宿ス。

此度ハ主夷「チオ」モ家ニアリテ大ニ悦ビ、奇ナル銅壺ヲ出シ、上好ノ茶ナト唐山
煎ヲ與ヘ、女夷等ニ命ヲテ米飯ヲ炊キ、酒肴ヲ備ヘテ夜ノ深ルマデ大ニ饗應セ
シ故、林藏カ齋ス處ノ斧、着ナガシ繻絆ヲ脱シテ、其厚意ヲ謝シケレハ、主夷大ニ
悦ヒシト。

同十九日モ同船ノ夷等交易ノ事アリテ留滯セシ故、舟ヲ出サス。
此所ハ船夷犬二頭ヲ易來リ船ニ入ル。

モト來リシ路ヲ歸ランニハ、此所ヨリシテ湖中ニ入り行クベカリシナレトモ、如
此異域ニ又再ヒ來ルヘシトハ思ハス、同シ無人ノ境ヲ歸ランヨリハ、此度ハ此河
ヲ下リ、未見ノ地理ヲモ多ク窺ヒ得、河流ノ曲直ヲモ審ニセン事ヲ慮リテ同船ノ
夷等ニ諭シケレバ、流ニ隨テ下ルハ艱苦ノ事モナク、マタ里程ノ遠近モサマテ

違ヒタル事モアラストテ、同廿日船ヲ出シ、山且夷ノ部落ニテ其家數十四五屋モアリヌル家アリニ當カテ、ト稱スル處ニ上陸ス。

此處ハ其ムカシ年代「デレン」ノ滿州假府ヲ置シ所ナレトモ、諸夷ト鬭争セシ事アリテ今廢ス。

此邊ヨリシテ下流、ボルト名付タル所ニ至ルノ間住居悉ク山且夷ナレハ、以下山且ノ字ヲ除テ、只夷家ノ字ノミヲ用ユ、又云フ事アル處ニアラサレハ、總テ其地名夷家ノ所在トイヘトモ省略シテ詳ニ載スル事ナシ。

漸ク其日モ斜陽ニナリテ歸リ來リ、船ヲ出シケレバ、僅六里モ下リテ「アチレイ」トイヘル處ニ至リ、海岸ニ泊ス。

此處ハ夷家十四五屋モアリテ、誠ニ富家モ多ク、其地形夷壤中ニシテ尤沃饒ナル所ナリ。

同廿一日此處ヲ發シテ、同廿二日ノ晚、ボルトイヘル處ニヤトリヌ。

此日經シ處ニ「シユク」ト名ツクル地アリ、少許ノ夷家アリ、此處ニテ鮭魚ヲ食ス、蝦夷島ニ比シテハ漁候少シク早キヲ覺フ、此漁業ノ事ハ河流ニ杭ヲ建テ、水底ニ網ヲ設ク、鮭魚上游シテ杭頭ニ至リ、進ム事アタハサルヲ知テ下流ニ向フ

時ハ、網中ニ入ルヲ待テアミヲアゲコレヲ獲ル。

「アチレイ」ヨリ「ボルト」ニ至ルノ間、里程僅ニ四五里ニタラス、然ルニ二日ヲ經シ事、船夷處々ノ夷落ニ上陸シ、其用ヲナセシ故、此遲滞アリ、下コレニ倣フ。

此邊ヨリシテ下流ハ「スメレン」ノ夷ノ部落ナリ、其人物、居家、作業スヘテ、カラフト島中ノ「スメレン」ノ夷ニ異ナル事ヲ見ス、故ニ夷家ノ字ノミヲ用ユ。

行舟一事ニシテ他ノ奇談ナキ所ハ、數日ヲ縮束シテコレヲシルス、下是ニ倣フ。同廿三日「ボルト」ヲ發シテ、日數四日ヲ經テ、同廿六日「カルメ」ト稱セル處ニ至リ、ハ

ラタ夷ノ家ニ宿ス、酒肴ノ設クマタ「キチ」ノ如シ。

四日ノ行舟中「バット」ト稱スル所ニシテ、船夷又一犬ヲ得テ船ニ入レヌ。

此日經シ處ニ「サンタン」ト名クル地アリ、其昔魯西亞賊「ホンゴ」河其國中川其國中ニ來テ此ヲ乗下シ、此處ニ至テ居家ヲ營ミ、傍夷ヲシテ其產物ヲ掠メ、此邊ノ地方ヲ吞食セント欲セシニ、滿州夷ノ爲ニ討伐セラレ、敗走シテ其國ニ去リシトソ不知、其時賊夷ノ建シ物ナルトテ、此處ノ河岸高キ處ニ黄土色ノ石碑二個ヲ建テ、林藏船中ヨリ遠望スレハ、文字ハ彫刻セルヤ否ヲシラス、衆夷此處ニ至リヌル時ハ、モタラス處ノ米粟草實ナド川中ニ散シテ此碑ヲ遙拜ス、其意何ナル

ヲシラス。

此處ノ北岸遙ニ異製ノ船三艘ヲ望見セシ故、何モノナル事ヲ問シニ、是、ホンゴ
「河源ニ住シテ其名、イダー」ト稱セル魯西亞ノ屬夷ナリ、時々、ホンゴ「河源」下
リテ此處ニ來リ、河濱ニ假屋ヲ造リ、在留シテ漁獵ヲナス者ナリト答フ、ホンゴ
「河源ハ住スル者只此夷ノミニアラズ、其他異族ノ者許多ナリト聞キシトイ
フ。

此邊ヨリシテ下流ス、河中ニ鯨魚多シ、其形狀白色ニシテ常ノ鯨魚ニ異ナリ。

同廿七日「カルメ」ヲ發シテ流レテ下ル「凡四里半許ニシテ、テホコー」ト稱スル
居家ノ二十許モ在クル處ニ至リ、夷家ニ宿ス。

此處モ亦魯西亞賊掠居ノ地ナリシニ、滿州夷ニ討セラレ、敗走セシ古戰場ナリ
トイフ、シカレトモ猶「キイレ」ト稱セル亞賊ノ屬夷時々往來ストイフ。

同廿八日此處ヲ發シテ日數四日ヲ經、「ア」ト稱セル處ニ露宿ス、コノ四日ノ間
泊セシ處ハ何レモ河岸ハ露宿ナルニ、悉ク卑濕ノ地ニシテ、柳枝ヲ多ク打チ舖キ
テ其上ニ獸皮ヲ覆ヒ宿ストイヘトモ、朝ニ至レハ水氣皮上ニ徹ストイフ。
此處ヨリ下流ハ河中ニ島嶼ノ類ナク、浩々トシテ海ニ異ナル「ナク」又僅ニ潮

水ノ増減アリトイフ。

八月二日此處ヲ出ルトイヘドモ、怒濤起リ來テ船ユカス、漸ク其程五里許モアリ
ヌル「ヒロク」ト云フ處ニ至リ、沙濱ニ宿ス。

此處「マンゴ」河ノ末、海ニ入ル所ナリ、夷家僅ニ四五屋アルノミ。

同三日ニハ船ヲ出シテ海岸ニ沿ヒ、「アツカ」トイヘル夷家モナキ所ニ泊シ、同五
日「クヨ」ト稱セル處ニ至リヌ、此處住夷ハ打開キタル處ノ中ニ散在シヌレ
ハ、其詳ナル事ヲシラサレ、家數處々ニ見ヘシ。

同五日船ヲ出サムト思ヒケレ、潮水減シ去テ此處減潮ノ時ニ至テハ海船動カ
面陸地トナル、許多ナリ、船動カ
ス、ヨウヤク其日ノ斜陽ニ至テ潮水來リ、船ヲ出ストテ得テ漕出ストイヘ、ソノ
程モナクテ日暮ケレハ、「チヤガエ」トイフ所ノ沙濱ニ寄宿ス。

同六日此處ヲ出テ、「ハカル」ト稱スル所ニ泊ス。

同七日ハ朝トクヨリ船ヲ出シヌルニ、霧スコシ覆ヘトモ、風波モ穩ニシテ、サマデ
艱苦ノ事モナク、「カラフト」島ノ「アケ」ニ歸リ渡リ、其夜ハ「ラツカ」崎ニ泊シ、明ル八
日ニ「ノ」トニ歸リツキケレハ、六月ニ殘シ置タル蝦夷モ出迎ヒ、共ニ恙ナキ事ヲ

悦ヒ其所ニ三日滯留セシニ、此ゴロ幸ニシテ地夷南方ニ遊漁セント船裝ヒタル者アリケレハ、蝦夷ト共ニ此船ニ乗組テ、同十一日滿州同行ノ夷ニ別レ、此處ヲ出テ、九月十五日、シラヌシノ府ニ至リ同廿八日、ソイヤニ歸リツキヌトイフ。

右東韃紀行ハ曾テ外務省ニ於テ間宮林藏ノ遺書ヲ求メシト、其養子孝順ヨリ差出シタルモノニシテ、間宮林藏口述、村上貞助(箱館在勤)編纂ト署ス、其際ノ上書中ニ「林藏儀ハ寛政ヨリ天保度ノ間ニ勤仕之内、北海道御用相勤、樺太與地ヨリ東韃地方迄罷越、地圖並風土形勢等ノ調仕候者ニ御座候處、老病致仕之節、書類地圖其筋へ差出候云々、東韃地方紀行中、前編、初編、又ハ里程記、地圖等ノ事ヲ載セ候へ共、右等ノ書類所持不仕、且又地名其外私先年實踐仕候タクハ相正シ候へ共、東韃地方寄之與地ニ至リ候テハ、原本ノ儘ヲ相認メ候間、自然傳寫ノ誤モ難計云々」トアリ、以テ紀行中地圖等ハ原本ヨリシテ欠クタルヲ知ルベシ、故ニ原註圖書ノ事等ヲ記スル者ハ總テ之ヲ刪除セリ。

栗本鋤雲ノ砲菴十種ニ「地理學者柴田收藏(佐渡人、嘉永年間)ノ説ニ、北海ノ北岸宗谷ノ岬ト唐太島ノ間ニ在ル海峡ヲ西書ニ「アニワ」ト云ヘルハ、間宮林藏ノ間宮ヲ取リテ音轉セルモノナリ」トアリ、嘉永安政年間ノ日本地圖ヲ見ルニ、

樺太補溪(今露領「サガリン」ノ哥爾薩港)ノ邊ニ「アニワ」ト記スル港アリ、果シテ柴田ノ説ノ如クンバ、間宮林藏ハ亦地理家ノ名譽ヲ得タルモノト云フベシ。

間宮林藏單身北邊ニ進ミ、又小舟滿州ニ渡ル氣候ハ、五、寒、蠶、地、ノ、險、難、毫、毛、屈、セ、ズ、遂ニ探檢ノ目的ヲ遂ク、露、境、ノ、實、勢、ヲ、視、察、シ、テ、歸、ル、何ゾ其氣力ノ壯ナル、眞ニ本邦前空ノ探檢家ト云フモ可ナリ。

〔高田屋嘉兵衛露人ニ拘へ去ラレ、因テ兩國ノ葛藤ヲ解ク〕

高田屋嘉兵衛ハ淡路ノ人、幼ヨリ孺學不羈ニシテ行テ修メス、家産ヲ蕩盡ス、攝州兵庫ニ移リテヨリ刻苦シテ業ヲ營ミ、數百金ヲ蓄ヘテ新ニ船ヲ造リ、年々貨物ヲ積ミテ松前ニ往來シ、大利ヲ得タリ。寛政十一年(一七九九年)幕府吏人ヲ蝦夷ニ遣リテ開拓ノ業ヲ起サシメ、又諸侯ニ命ヲテ邊境ヲ守ラシム、尋テ擇捉ノ外寇ノ要衝ニ當ルヲ以テ、船ヲ送ラントスレトモ、海路險難ニシテ、能ク航行スル者ナク、唯蝦夷人年ニ一回往來スルノミ、幕府由テ全國ニ令シ、航海ニ練達セル者ヲ募ル、嘉兵衛奮然トシテ之ニ應ジ、船ヲ艤シテ擇捉ニ至ル、島上曠漠トシテ人煙ヲ見ズ、土人(人口七八百人)

〔高田屋嘉兵衛露人ニ拘へ去ラレ、因テ兩國ノ葛藤ヲ解ク〕

纒ニ穴居シ、天然物ニ頼リテ生活スルノミ、嘉兵衛之ニ業ヲ執ルノ方法ヲ示授ス、幾
 バクモナク國後ニ至リ、吏人ノ巡視ヲ請フ、是レ此島ノ開クタル端緒ナリ、其後二年
 幕府其功ヲ嘉ミシ、祿ヲ與ヘテ北海往來ノ官船ヲ管理セシム。時ニ露西亞人屢バ
 北邊ヲ窺ヒ、文化八年(一八一一年)又、デーヤナ號來リ國後ニ上陸ス、駐在吏人奈佐政
 辰其前罪ヲ責メ、艦長、ゴロニ等七人ヲ擄ニス、露船ノ士官、リコルド一タビ艦ヲ
 返シ、翌年再ビ國後ニ來リテ我國ノ漂民六人及ビ曩ニ蝦夷地ニ於テ拘ヘ去リタル
 南部人某ヲ還付シ、露人ヲ返サレシメテ請フ、幕吏依違シテ應ゼズ、偶マ近海ヲ通航
 セル日本船アリ、リコルド之ヲ見テ追ヒ逼リ、船中ニ在ル嘉兵衛ヲ執ヘテ本艦ニ致シ、
 迫リテ嘉兵衛等ヲ露國ニ引致セントス、嘉兵衛泰然トシテ意ヲ決ス、水手五十五人
 ノ内十人嘉兵衛ト死生ヲ共ニシ、同行セント云ヒ、其一人病ニ罹ル者仍ホ強テ同行ヲ
 求ム、嘉兵衛乃チ餘ノ四十五人ニ仔細ヲ語リテ之ト別レ、國後ヲ發シテ九月十九日東
 察加ニ着ス、リコルドハ嘉兵衛ヲ拘フト雖モ、待遇甚タ厚ク、食ヲ共ニシ、旅舎ヲ同ウ
 ス、互ニ手狀ヲ以テ稍ヤ語ヲ通ズルニ至ル、東察加ニ留ルヲ月餘、旅舎ニ給仕ノ一
 少年アリ、伶俐ニシテ文字ニ通ズ、嘉兵衛之ニ露語ヲ學ビ、又日本語ヲ彼ニ教フ、既

ニ、粗ホ露國ノ事情ヲ知り、一日、リコルドニ向ヒ、我兩國ノ爲ニ調和ノ術ヲ書シ、ゴロ
 一ニ等ヲシテ國ニ歸ルヲ得シメント云フ、リコルド奮躍シテ悦ビ、上司ニ稟議
 ノ上、嘉兵衛ヲシテ其事ヲ成サシメント、翌日、リコルドハ東察加ヲ發シテ、オコツク
 ニ赴ク。文化十年五月朔日、リコルドハ嘉兵衛及ビ水手(是ヨリ先水手數人病シ
 テ死ス、嘉兵衛之ヲ其地ニ葬ル)ト共ニ乘艦シテ東察加ヲ拔錨シ、廿九日國後ニ着ス、
 時ニ、リコルドハ嘉兵衛ヲ疑フノ色アリ、水手ト共ニ上陸セシメズ、嘉兵衛因テ國後
 ノ役所ニ呈スルノ書ヲ作りテ先ツ上陸セシメ、我ハ後ヨリ上陸セント欲スルナレ
 也、若シ露人疑ヒテ許サズンバ、彼ト刺シ違ヘテ國辱ヲ貽サマルベシト、旨ヲ記シ、
 之ヲ水手ニ付シ、又其決心ヲ告ゲ、刀ヲ拔キテ鬚ヲ剪リ、之ヲ家妻ニ、又佩刀ヲ嗣子ニ遺
 ラシム、水手ノ去ルニ臨ミ、リコルド之ニ告ルニ、明日來リテ、ゴロニシテ、安否ヲ告
 タズハ、我又汝ノ大將(水主等、嘉兵衛ヲ指シテ斯ク云フ)ヲ拘ヘ去ルベキヲ以テス、嘉
 兵衛刀ヲ引キ寄セ、リコルドヲ睨シテ曰ク、汝何ゾ信義ヲ顧ザル、我豈ニ再ビ汝ノ爲
 ニ辱メラルベクシヤト、リコルド怖レテ嘉兵衛ヲ慰メ、其上陸ヲ許ス、翌日嘉兵衛、リ
 コルドノ謝狀ヲ携ヘテ上陸シ、國後ノ役所ニ至リテ、彼國ノ情勢ヲ述ベ、囚虜ヲ還ヘ

〔高田屋嘉兵衛露人ニ拘ヘ去ラレ因テ兩國ノ葛藤ヲ解ク〕

三七〇

纒ニ穴居シ、天然物ニ頼リテ生活スルノミ、嘉兵衛之ニ業ヲ執ルノ方法ヲ示授ス、幾
バクモナク國後ニ至リ、吏人ノ巡視ヲ請フ、是レ此島ノ開ケタル端緒ナリ、其後二年
幕府其功ヲ嘉ミシ、祿ヲ與ヘテ北海往來ノ官船ヲ管理セシム。時ニ露西亞人屢バ
北邊ヲ窺ヒ、文化八年(一八一一年)又、デーヤナ號來リ國後ニ上陸ス、駐在吏人奈佐政
辰其前罪ヲ責メ、艦長、ゴロニー等七人ヲ擒ニス、露船ノ士官、リコルド「一タビ艦ヲ
返シ、翌年再ヒ國後ニ來リテ我國ノ漂流民六人及ビ曩ニ蝦夷地ニ於テ拘ヘ去リタル
南部人某ヲ還付シ、露人ヲ返サレシメテ請フ、幕吏依違シテ應ゼズ、偶マ近海ヲ通航
セル日本船アリ、リコルド「之ヲ見テ追ヒ逼リ、船中ニ在ル嘉兵衛ヲ執ヘテ本艦ニ致シ、
迫リテ嘉兵衛等ヲ露國ニ引致セントス、嘉兵衛泰然トシテ意ヲ決ス、水手五十五人
ノ内十人嘉兵衛ト死生ヲ共ニシ、同行セント云ヒ、其一人病ニ罹ル者仍ホ強テ同行ヲ
求ム、嘉兵衛乃チ餘ノ四十五人ニ仔細ヲ語リテ之ト別レ、國後ヲ發シテ九月十九日東
察加ニ着ス、リコルド「ハ嘉兵衛ヲ拘フト雖モ、待遇甚タ厚ク、食ヲ共ニシ、旅舎ヲ同ウ
ス、互ニ手狀ヲ以テ稍ヤ語ヲ通ズルニ至ル、東察加ニ留ルヲ月餘、旅舎ニ給仕ノ一
少年アリ、伶俐ニシテ文字ニ通ズ、嘉兵衛之ニ露語ヲ學ビ、又日本語ヲ彼ニ教フ、既

ニ、粗ホ露國ノ事情ヲ知り、一日「リコルド」ニ向ヒ、我兩國ノ爲ニ調和ノ術ヲ畫シ、ゴロ
「リ」等ヲシテ國ニ歸ルヲ得シメント云フ、リコルド「雀躍シテ悦ビ、上司ニ稟議
ノ上、嘉兵衛ヲシテ其事ヲ成サシメント、翌日「リコルド」ハ東察加ヲ發シテ、オコツク
ニ赴ク。文化十年五月朔日「リコルド」ハ嘉兵衛及ビ水手(是ヨリ先水手數人病
テ死ス、嘉兵衛之ヲ其地ニ葬ル)ト共ニ乘艦シテ東察加ヲ拔錨シ、廿九日國後ニ着ス、
時ニ「リコルド」ハ嘉兵衛ヲ疑フノ色アリ、水手ト共ニ上陸セシメズ、嘉兵衛因テ國後
ノ役所ニ呈スルノ書ヲ作リテ先ツ上陸セシメ、我ハ後ヨリ上陸セント欲スルナレ
ル、若シ露人疑ヒテ許サスンバ、彼ト刺シ違ヘテ國辱ヲ貽サマルベシトノ旨ヲ記シ、
之ヲ水手ニ付シ、又其決心ヲ告ゲ、刀ヲ拔キテ髻ヲ剪リ、之ヲ家妻ニ、又佩刀ヲ嗣子ニ遺
ラシム、水手ノ去ルニ臨ミ「リコルド」之ニ告ルニ、明日來リテ「ゴロニー」ノ安否ヲ告
タズハ、我又汝ノ大將(水主等嘉兵衛ヲ指シテ斯ク云フ)ヲ拘ヘ去ルベキヲ以テス、嘉
兵衛刀ヲ引キ寄セ、リコルド「ヲ睨シテ曰ク、汝何ゾ信義ヲ顧ザル、我豈ニ再ヒ汝ノ爲
ニ辱メラルベクンヤト、リコルド「怖レテ嘉兵衛ヲ慰メ、其上陸ヲ許ス、翌日嘉兵衛「リ
コルド」ノ謝狀ヲ携ヘテ上陸シ、國後ノ役所ニ至リテ彼國ノ情勢ヲ述ベ、囚虜ヲ還ヘ

シテ兩國ノ葛藤ヲ解クノ得策タルヲ説ク、吏人之ヲ容レ、先ツ前年露人ノ掠奪シタル武器財物ヲ我ニ返付セシムベシト云フ、嘉兵衛露艦ニ至リテ之ヲ告グ、リコルド喜ンテ其旨ヲ領シ、一タビ、オコックニ歸リ、九月ニ至リテ箱館ニ來リ、約ノ如ク掠奪ノ物ヲ返付ス、是ニ於テ幕府「ゴロニ」等七人ヲ「リコルド」ニ交付ス、露人大ニ悦ビ、深ク嘉兵衛ノ厚義ヲ感謝シ、東察加ニ歸航ス、是ヨリ北邊ノ騷擾止ム、明年三月、幕府嘉兵衛ノ功ヲ賞シ、金若干ヲ與ヘ、舊ノ如ク北海往來ノ官船ヲ管理セシム。其後嘉兵衛家益ス富ミ、淡路ニ歸リ、商事ヲ其弟ニ委ヌ、阿波藩主其名ヲ聞キ、功ヲ賞シテ、小高取ノ格式ヲ附與ス、文政中病ヲ以テ歿ス、年五十九、嘉兵衛身ノ丈低ク、言舌爽明ニシテ、眼光人ヲ射ル（ゴロニ）ノ記事亦其人ト爲リヲ稱ス、書ヲ讀マズト雖モ、略ホ理義ニ通シ、能ク財ヲ捨テ、人ノ急ヲ救フ、人皆テ其德ニ感ズ。

明治十三年七月、車駕兵庫縣ニ至ル、縣令上疏シテ高田屋嘉兵衛ノ子孫ノ探祿ヲ請ヒ、併セテ其略傳（義文）ヲ呈ス、上疏ニ曰ク、

管下淡路國津名郡都志村平民高田嘉兵衛功績海外ニ傳フ、而ルニ今其遺族離散零落、存スル者殆ト微ナリ、有志ノ徒往々之カ爲ニ痛惜慨歎スル者アリ、謹テ按ス

ルニ、嘉兵衛始メ船戶ノ備トナリ、漸ク巨船ヲ造リ、氷雪無人ノ境ニ航シ、北海數十ノ島嶼ヲ往來シ、終ニ穴居腥食ノ氓ヲシテ烹煮シテ食シ、構造シテ居セシム、今ニ至リ其民仰テ神トナス、蓋シ島夷ノ化ニ向フ、多ク其功ニ因ルナリ、故ニ内地ノ北海ニ航スルモノ、嘉兵衛ノ船號山形ヲ著クルトハ、最モ島民ノ畏敬スル所トナル、餘光ノ及フ今猶ホ斯ノ如シ、且ツ其拘セラレ葛模沙都加ニ在ルヤ、拮据艱辛、奇計百出、萬死ヲ脱スルモノ數ニナリ、而ルニ經年一日ノ如ク、國旂ヲ辱メザルヲ以テ任トナス、蘇武ノ節ト雖モ以テ尙フル莫シ、是ノ時ニ當テ佛魯兵ヲ用ヒ、北方多事、幕吏頗ル處置ニ困ム、若シ嘉兵衛ノ能ク調停變理スル無リセバ、則チ我國ノ魯國ト戰端ヲ開クモ亦未ダ知ルベカラズ、其他偉績奇勳、土人ノ口碑ニ傳ルモノ枚擧ニ遑アラザルナリ、臣伏シテ願クハ國家休明ノ恩、其子孫ヲ探録シ、厚ク存卹ヲ賜ラバ、則チ以テ頑ヲ廉ニシ、懦ヲ立ツルニ足ラン、其事跡詳細ノ如キハ開拓使記錄書、及魯西亞人（ゴロニ）力骨兒禿著ス所ノ遭厄日本記事等ノ書ニ見ル、今岡田僑撰テ所ノ傳アリ、其概ヲ得ルモノニ似タリ、謹テ謄寫ニ付シ、一本ヲ上ル云々。

〔露國ニ至リシ日本人ニ漂着ニ在留ニ歸化〕

鎮國以後邦民ノ露領ニ漂着シタル者少カラス、土人ノ爲ニ害セラレシ者アリ、或ハ留リテ其地ノ婦女ト婚セル者アリ、又露國官吏ノ爲ニ莫斯哥府モスコフ或ハ聖彼得堡府セントピートルズブルグニ送致セラレシ者數人アリ。

増田甲齋モ亦露國ニ歸化シタル一人ナリ、増田ハ掛川藩ノ士、初メ立花久米藏ト稱ス、砲術ヲ善クス、任侠ヲ喜ビ、常ニ殺伐ノ巷ニ往來ス、後髪ヲ剃リテ日蓮宗ノ僧トナリ、池上本門寺ノ執事ニマデ昇進ス、嘉永中（一八五〇年）代露國軍艦ノ伊豆海ニ來ルヤ、奮然縮衣ヲ脱シテ之ニ赴キ、竊ニ船長ニ謀リ、同國ニ渡リテ露語ヲ修メ、傍ラ日本語ノ教授ヲナシ依テ日本語學校ヲ設立ス、當時幕府ノ海外ニ行ク者ヲ處スルノ嚴重ナリシヲ以テ、已ムテ得ズ、露國ニ歸化シ、名ヲ改メテ、ヤマトフ（大和夫）ト稱ス、既ニ露廷ニ召サレ、アレキサンデル第二世ニ事ヘ、歴進シテ外務官トナリ、素堂備叔王武第三等勳章ヲ授ケラル。明治六年岩倉全權大使露京ニ至リシキ、之ニ面シ、諭シテ歸朝セシム、其官ヲ辭スルニ當リ、露帝其勤勞ヲ賞シ、年金三百ルーブル（凡二百廿五圓）ヲ與ヘ、且ツ旅費七百ルーブル（五百廿五圓）ヲ給ス、歸朝ノ後姓名ヲ改メテ増田

甲齋ト稱ス、門ヲ杜シテ世交ヲ絶チ、優游老ヲ養ヒ、明治十八年五月病ヲ以テ歿ス、年六十五。増田甲齋ハ山田長政ト類テ同ウシテ徹ナル者ト云フベキナリ。

其他本邦船手等ノ露領ニ漂着シテ其國ニ留リ、遂ニ歸化シテ譯官トナリ、或ハ日本語ノ教師トナリシ者數人アリ。

露國政府ノ新地ヲ略スル、先ツ宣教師ヲ派シテ其國教タル希臘教ヲ傳播シ、之ヲ傳播シ、且ツ土情ヲ探知スルノ手段トシテ土語ヲ學習ス、希臘教ノ東隄地方ヨリ東察加并ニ樺太千島ノ諸島ニ流布シ、其布教ト侵略ノ企業ト相伴フハ一朝一夕ハ事ニアラズ、亦以テ露國政策ノ在ル所ヲ察スベキナリ。

綜結。

余ハ今本書ノ記ヲ了ルニ際シ、結論ヲ附シテ緒言ト相照應セシメ、以テ今世經國上ノ要義ヲ明ニセント欲ス。余ハ先ツ第一部ニ於テ日本ト歐米トノ交通ニ關スル事ヲ叙シ、豊臣秀吉、徳川家康ガ貿易ヲ獎勵セシ原因ハ自家ノ富實ヲ圖ルニ在リシ事(兩將ノ多年兵ヲ用ヒタルニ關セズ、金幣ニ富ミシヲ見バ、思ヒ申ニ過ギン)切支丹○教ヲ禁制シタルハ已ムヲ得ズト雖モ、之ト同時ニ鎖國ノ方針ヲ取リ、大船ノ製造ヲ止メタルハ拙劣ノ政策ニシテ、外人ノ渡來ヲ拒絕シタルハ姑ク可ナリトスルモ、之ト同一ニ邦人ノ外航ヲ禁マタルハ經國上ノ大失錯タリシ事、縱ヒ切支丹教徒ノ害アリタルニセヨ、其文物ヲ我國ニ紹介シタルノ功ハ決シテ沒スベカラサル事、慶長十五年即チ一六一〇年ニ日本船ノ始テ亞米利加ニ航セシハ實ニ世界ノ航海史ニ特筆大書スベキモノナル事、亞米利加ニ日本人種ガ渡リタルノ證據歴然タル事ヲ述ベ、第二部ニ於テ日本ト西南洋諸國トノ交通ニ關スル事ヲ叙シ、近古西南洋ノ交通貿易最モ繁盛ヲ極メ、數百ノ商船往來シ、我ヨリ進マテ貿易ヲ爲シタル事、到ル處邦民移住シ、日本町ヲ形成シテ、外人ヲシテ恐々縮々、我後ニ瞻若タラシメタル事ヲ

述ベ、然ルニ亦鎖國ノ愚策ニ遭フテ交通貿易中斷ノ不幸ヲ見、一朝救フベカラザルノ禍害ヲ後世子孫ニ遺シタル事ヲ慨歎セリ。最後ノ第三部ニ於テ日本ト亞細亞大陸東部トノ交渉ヲ叙シ、古昔邦人ガ滿州ニ渡リタリト云フ説ニツキテノ考證、露人ノ遠征東侵ヲ專トスル際、幕府ノ姑息偷安ノ爲ニ我境土ヲ蠶食セラレテ千載ノ國害ヲ遺シタル事ヲ述ベ、且ツ以上三部ノ中ニ於テ、各人ノ雄壯ナル征略冒險ナル探検活潑ナル貿易ノ事ヲ列擧シ、其他域外ニ或ハ功業ヲ成シ、或ハ學術ヲ研究シタル事蹟ヲ歴記セリ。此等ノ事業中、固ヨリ云フニ足ラサル者アリ、取ルベカラザル者アリト雖モ、然レモ其我國光ヲ増シ、我國富ヲ進メ、暗々裡ニ國家ニ利益ヲ遺シタルヲ決シテ小少ニ非ルヲ知ルベキナリ。世ノ歴史ニ疎キ者、思想ノ遠大ニ及バザル者ハ其直接ニ今日ニ關セサルガ如クナルヲ以テ、輕々之ヲ看過ス、何ゾ其レ識見ノ狹隘ナル。

夫ノ鎖國退守ノ餘毒ハ延イテ今日ニ及ビ舊時ノ思想尙ホ國民ノ胸裡ニ埋伏シ、『智識ヲ世界ニ求ムル』ノ國是一タヒ定マルモ、政事者常ニ内治ノ瑣務ニ醒醒シ、海外ニ對スルノ事ニ關シテハ毎ニ恭縮ノ方針ニ出テ、事々物々機會ヲ失フナリ。余

ハ深ク此現狀ニツキテ感スル所アリ、乃チ初期ノ帝國議會開設ノ際ニ於テ「國庫剩餘金ヲ以テ海外ノ土地ヲ買フベシ」ト題スル一論ヲ當時ノ新聞紙ニ寄シテ世ニ公ニシタルコトアリ、其略ニ曰ク

「吾人ハ祖先ニ對シテ恥ツルコトナキカ、昔者我國人元氣ノ旺盛ナルニ當リテヤ、專ラ進取主義ヲ執リ、遣使侵略、通商等ノ事歷其成迹ノ赫著タル者アリ、抑モ今日ノ憂ハ人智ノ進マザルニ非ズシテ、人心ノ萎靡シタルニ在リ、嗚呼我國人ノ氣風ハ斯ノ如キ軟弱ノモノニアラザリシニ、明治以後征韓方策ノ文弱論ニ破ラレ、尋テ對韓政略ノ無膽政治家ノ爲ニ失敗シタルヨリ、邦人ノ氣風、日一日ヨリ衰弊シ、徒ニ螻蟻的ノ經營ニ齷齪トシテ、大海ニ游泳スルヲ知ラズ、僅ニ一地方ノ小利害ニ汲々トシ、小黨派ノ出入ニ苦慮スルノミ、今ノ人士中能ク國家ノ大計ヲ立テ、兼テ世界ノ大勢ニ通ズル者幾何カアル、斯クノ如キ狀況ニシテ今ノ世界ニ立チ、國家ヲ維持セント欲ス、亦難カラズヤ、邦人ノ安ヲ偷ムコト此ノ如キカ、余等恐ル、睡中盜賊門ヲ開キ、テ室内ニ闖入スルノ奇變ニ遭ハントテ。今ヤ歲計上餘シタルノ國金年々積ンテ夥多ノ額ニ達セリ、此剩餘金ノ用途ニ就キテハ、或ハ高利公債ヲ償還

セント云ヒ、或ハ地租減輕ノ用ニ供セント云ヒ、其他論者ノ求ムル所幾十件、是等ノ事ニ使用スルハ固ヨリ不可ナリトセズ、然レモ事ニ緩急アリ、余ノ見ル所ヲ以テスレバ、此剩餘金ハ尋常ノ事ニ費スベカラズ、余ハ此總金額ヲ以テ海外ニ土地ヲ買フノ資金ニ充テントテ希望スルナリ、海外植民ノ事今日ノ急務ニシテ世人ノ往々唱道スルナリト雖モ未ダ土地ヲ得ズシテ徒ニ他國ノ領土ニ植民スルモ、未ダ大ニ其功ヲ收ムルニ足ラザルヲ如何セン、且ツヤ土地ヲ領スルハ、單ニ土地其物ノミニ就テ利害ノ算ヲ立ツベキ者ニアラズ、表面ノ算數外ニ測ルベカラサルノ國益アレバナリ、其例米國が一八〇三年ニ、一千五百萬弗ヲ以テ、ミスシスシツピ河以西太平洋沿岸ニ至ル廣大ノ土地ヲ佛國ヨリ、一八一八年ニ、五百萬弗ヲ以テ、フロリダ州全土ヲ西班牙ヨリ、一八四八年ニ、千五百萬弗ヲ以テ、テキサス、カリフォルニア等六區域ノ地ヲ墨西哥ヨリ、一八五四年ニ、一千萬弗ヲ以テ、メシラノ大澤地方及ビ、アリゾナヲ同國ヨリ、一八六八年ニ、七百廿萬弗ヲ以テ、亞米利加ノ西北部ナル、アラスカヲ露國ヨリ買收シ、又英國が一八六三年ニ、ボルネオ島ノ一部ヲ買收シタルガ如キ是ナリ、聞ク近者、マニラノ土地ハ其所領國之ヲ買却セ

ントスト、果シテ然ラハ此機會失フベカラズ、其他南洋諸島中、或ハ亞米利加洲中、買收占領スベキモノアラバ、之ヲ買收占領シテ、以テ邦人移住ノ計畫ヲ爲スベシ、又我軍艦ハ時々巡洋シ此等ノ探検ヲ務ムベキナリ、曾テ某大臣ガ僅々數萬圓ノ植民費ヲ歲計豫算案ニ加ヘタルガ如キ小計畫ヲ海外ニ試ムルハ余等ノ欲セザル所ナリ、宜シク一舉シテ海外ノ土地ヲ買收スルノ案ヲ立ツベキナリ。」

前外務大臣某モ亦明治廿六年三月植民協會ノ創立會ニ於テ一言スル所アリ、曰ク

『今ヲ距ルコト十六七年、我小笠原島ノ島嶼キトモ云フベキ西班牙領ノ、マリアナ群島及ヒ、カロライン群島ヲ買收シ、尙ホ進ンデ、ニウギチヤノ一部ニ植民ヲ試ムルノ意見ヲ建議シタル人アリシモ、用非ラレズ、其後、ボルネオノ北海岸ニシテ、我九州ノ地ト伯仲スベキ、サバト稱スル土地ヲ一百五十萬圓ニテ、其領主タル、ウエルチー及ヒ、スル、兩地ノ酋長ヨリ、譲リ受ク得ベキ好機會アリテ、時ノ内閣ニ謀リシ人アリシモ、又用非ラレザリシ、今ヤ、カロライン諸島中、ボネビニハ西班牙國ヨリ政廳ヲ置カレ、新キチヤノ一部ハ獨逸領トナリス、又、ボルネオ北海岸ノ、サバト』

地方ハ英國ノ版圖ニ入り、所謂ボルネオ會社ノ所有トナリテ猶ホ夫ノ昔時ノ東印度會社ノ有様ヲナシ居リ、現ニ毎年十三、四萬弗ノ歲入剩餘アリト云フ、今ヤ復タ奈何トモスベキナシト雖モ、五洲ノ廣キ、豈ニ尙ホ吾人が指ヲ染ムベキノ遺地ナシトセンヤ。』

我國鎖國以來、海外ノ事ニ於テ幾タヒカ機會ヲ失ヘリ、土地領有ノ國富ヲ増進シ、國力ヲ養成スルニ必要ナルコト火ヲ親ルヨリモ明ナルニ、其レスラ踏阻遠遊、徒ニ目前ノ小事ニ汲々トシテ、屢バ時機ヲ逸セシハ、深ク遺憾トスベキナリ、然リト雖モ、既往ハ追フベカラズ、今時并ニ將來國家經濟ノ局ニ當ル者深ク鑒ミル所アリテ、料理ハ任ヲ盡サハルベカラザルナリ。

今夫レ當世ノ士人中、外國ノ書ヲ讀ミ、外國ノ行ヲ試ミ、稍ヤ域外ノ事情ニ通スル者ナキニアラズト雖モ、多クハ歐米外形ノ事物ニ心醉シ、飄々泛々、學得スル所ヲ以テ一身ノ榮利ニ供スル、所謂曲學阿世ノ徒ニシテ、能ク世界ノ形勢ヲ談ズルモ、未ダ以テ共ニ國家ノ大計ヲ語ルニ足ラズ、之ニ反シテ日本國ノ日本國タルヲ知ルノ士人ハ、愛國忠君ノ誠心ニ於テ、或ハ欠クルナキモ、其着眼國內ヲ出デス、保守一變シテ

頑陋トナリ、思想局促、所論淺薄、亦共ニ今世經國ノ要ヲ論スルニ足ラズ、然レモ前者ニ比セバ幾分ノ取ルベキ所ナキニアラズ。抑モ思想ノ變轉極リナク、極端ヨリ極端ニ走ルモノ、邦人ノ如キ甚シキ者ハアラズ、開國以前、專ラ守舊ハ方針ヲ取リシモ、是レ邦人ノ特性ニアラズシテ、一時ノ變轉ニ過キズ、故ニ開國以後數年ニシテ人心俄然トシテ轉回シ、自尊自大ノ舊風一變シテ外國崇尊トナリ、曾テ夷狄視シ、禽獸視シタル者ニ對スルニ長上ノ如ク、又師父ノ如シ、自屈自侮ノ陋風隨テ起リ、開港地先ツ其弊ヲ傳フ、條約改正ノ議起ルニ及ンデ、一種ノ政事者アリ、自ラ狂ケテ他ニ諂ヒ、以テ改正ノ業ヲ成サント欲シ、甚シキハ國ノ國タル實ヲ失ヒ、一國ノ期望ニ反シテマデモ功ヲ已ニ收メントシ、其野心ト共ニ倒レタルガ如キ、徒ニ國ノ軀面ヲ害スルニ過キザルノミ。

夫レ一國ノ存亡榮辱タル其由テ來ル所深遠ナリ、目前ノ小事ヲ以テ左右シ得ベキニアラズ、今ノ非内地雜居論者ガ雜居ヲ以テ國ノ存亡ニ關スルガ如クニ言フハ、猶ホ當代ノ政事者ガ自屈諂他ヲ以テ條約改正ヲ爲シ得ベシトスルノ誤想ニ等ク、又往時ノ政事者ガ鎖國政略ヲ以テ日本國ニ寧ロ一族政府ニテ永遠ニ維持シ得ベ

シトスルノ誤想ニ等シ、事狀ハ異ナレモ其誤ヤ一ナリ、是レ皆見ル所ノ淺小ニシテ事物ヲ混同スルノ弊ナリ、一事ヲ舉措スル爲ニ併セテ他ノ事ニマデ必ズ連及セザルベカラズト思惟スルノ過ナリ。試ニ看ヨ、鎖國ノ政策ヲ取ラズンハ葡萄牙人ニ實ハ天主教徒ニテ排斥スルノ道ナカリシカ、何ゾ其レ然ラン、僅々タル葡人ヲ制スルヲ能ハス、又他ノ歐洲人ヲ容ル、ヲ能ハズトセバ、是レ同時ニ鎖國ノ事ヲ成シ遂グルノカナキモノト云ハザルヲ得ズ。又國法ヲ變シ(改正ト異ナリ)強テ習俗ヲ更メ(改良ト異ナリ)ズハ條約改正ノ事行ハレズト云フガ如キ、是レ亦事物ヲ混淆且ツ顛倒スルモノニシテ、此ノ如キハ改約其事ヲ求ムルモノニ止リ、改約ノ効益ヲ求ムルモノニアラズ、改約未ダ成ラザルニ、繁法細律頗ニ世ニ出デ、習慣未ダ有ラザルニ、法律先ヅ布キ、人民茫トシテ適從スル所ニ迷フ、是レ則チ法ヲ率非テ人ヲ驅ル者ニシテ、被治者ノ困苦果シテ幾何ナルヲ知ルベカラズ、其餘波過多ノ法律者ヲ現出シ、或ハ社會ノ良民ト衝突スルハ、弊、日一日ヨリ長ゼントス、是レ實ニ國家ノ前途憂フベキノ事ニアラズヤ、弊源既ニ明ナリ、何ゾ早ク之ヲ救匡スルノ道ヲ求メザル。

今ヤ條約改正ノ期ヲ過クルヲ幾十年、政府ハ屢バ改正談判ニ蹉跌シタルヨリ、更

ニ國民ノ輿論ヲ後援トシ、舊來不當ノ條約ヲ撤去シ、新ニ適當ノ條約ヲ締結シ、以テ將來邦國ヲ益スルノ功業ヲ成スノ大勇斷ナク、國民ノ一部亦非内地雜居論ヲ唱フル者アリ、何ゾ其識見ノ淺薄ニシテ固陋ナル、思慮ノ狹隘ニシテ怯懦ナル。此ノ如ク唯小議論ノ紛々タルヨリシテ、因循疑懼ノ間ニ時機ヲ失シ、邦國ノ發達ヲ害スルヲ幾何ナルヲ知ルベカラズ、余ハ敢テ斷言ス、内地雜居ノ如キ、宜シク法律、并ニ稅權、回復ノ時ヲ以テ之ヲ許スベキナリ、條約ヲ改正スルモ雜居ヲ許スヲ欲セザルハ適マ對等ノ國交ヲ爲ス可能ハザルヲ證スルモノニシテ、事實行ハレザルノ空論タルヲ免レズ、其歸着スル所、條約改正、拒絕論、タラシノミ。看ズヤ、米國ノ新國ヨリシテ暫時ノ間ニ今日ノ富盛ヲ致シタル事實ヲ、看ズヤ、魯國ノ小國ヨリ一躍シテ今日ノ強大ヲ致シタル事實ヲ、外資ノ移入、外人ノ使役ノ如キ、之ヲ拒マザルノミナラズ、多ク益ス辨テ、因テ以テ國ノ富強ヲ助長スルノ勢アルニ非ズヤ。又世ニ一種ノ國粹論者、即チ杞憂論者、アリ、外國ノ文物ヲ取り、外國ノ器用品ヲ用ウルハ、即チ愛國ノ心ヲ消シ、國基ヲ弱ムルナリト斷言スルハ、亦事物ヲ混想スルモノニシテ、頗ル偏僻ノ論ト云フベシ、曾テ獨逸ノ上流社會ガ佛國ノ文物ニ心ヲ蕩シ、國人衣食ノ料亦多ク

之ヲ外國ニ仰キ、内國ノ供給スル所僅々タリシノミ、普魯斯王、フレデルヒ第二世言ヘルコアリ、曰ク、普國人ハ平生質朴ナルモ、其本性ニアラズ、僅ニ財ヲ有セバ、力ヲ極メテ外貌ヲ修飾シ、高帽、織靴、輕衣、小杖、意氣揚々タリト、以テ獨逸人ノ性行ヲ察スベシ、獨逸人ノ外物ニ心ヲ移シ易キ性質アルコト此ノ如シ、固ヨリ稱贊スベキノ事ニアラズ、否ナ大ニ非難スベキノ事ナリト雖モ、之ガ爲ニ愛國心ヲ失ヒ、國力ヲ弱クシタルコト聞カザルノミナラズ、國運月ニ盛ニ、年ニ榮フルニアラズヤ、亦以テ國力ノ消長ヲ決スベキモノハ、多ク此等ノ事ニ關ラズ、別ニ存スルモノアルヲ知ルベシ。之ヲ要スルニ、一國ノ主權ニシテ確乎トシテ動かズ、官民共ニ國ノ國タル所以ニ就キテノ觀念深切ナルニ於テハ、外人ノ如キ、將テ外資ノ如キ、何ノ恐ルハ、カカ之アラシ、况ヤ事物ノ改新ヲヤ、苟モ我國ニ害ヲ爲スモノアラシカ、時ニ隨ヒ之ヲ排除スベキノミ、已ムコトナクンバ米國及ビ露國ノ支那人ニ對スル處置ヲ決行スルモ亦不可ナルニアラズ、若シ國民ニ此觀念ナキハ、千萬ノ兵アリ、百艘ノ軍艦アルモ、將タ何ニカセン、戦々競々トシテ外人ヲ容ル、能ハズ、或ハ之レヲ容ル、ヲ知リテ其害惡ヲ制スルコト能ハズ、能フテ爲ササルノ國ハ、是レ共ニ國ニシテ國ニアラズ、我國

小ナリト雖モ、四千萬ノ人民ト二千餘年ノ歴史ヲ有ス、此國力ヲ有スルヤ固ヨリ疑ナシ、而シテ條約改正即チ權理回復ハ此實力ヲ養成スルノ一手段タレバ、之ヲ改正スルノ最モ急務タルヤ辯ヲ待タザルナリ。

曾テ我日本國ハ世界ニ於ケル日本國タラントシテ中道ニ廢セリ、今ヤ益ス却歩シテ日本國ノ日本國タルヲ知ラザル者スラアルニ至ル、此陋弊ヲ絶ツテ經國上最モ緊急タリトス、世運循環極リナシ、亞洲ノ強盛決メ期スベカラザルニアラズ、彼ノ今日世界ヲ以テ歐洲ノ世界トスルノ歐人ノ如キ、我レ何ツ企及スベカラズトシテ自棄スベキモノナラシヤ、歐人ノ今日世界ニ勢力ヲ有スルハ偶然ニアラズ、其同人種相結合シ競フテ世界ノ事業ヲ爲シ之ガ爲ニハ百難ヲ排シテ進ムニ由レリ、亞人ニシテ歐人ト並馳シ且ツ之ヲ凌駕セント欲セバ、亦相結合シ幾層ノ奮勵ヲ以テ世界ノ事業ヲ爲スノ外ナキナリ、殊ニ亞洲ノ要地ニ位セル我國ノ如キ其任最モ重大ナリト謂ハザルベカラズ、故ニ日本人タル者ハ能ク日本國ノ日本人タルト同時ニ世界ニ於ケル日本人タルト期セザルベカラズ、今日何ノ暇アリテカ唯國內ノ近小事ニノミ齷齪タルベクナラズ。

(畢)

〔附錄〕

◎世界形勢通覽表記。

蒙古ノ日本ニ入寇シ、明朝ヲ攻滅シタル頃ヨリ、即チ「マルコ・ポーロ」ノ支那行ヨリシテ、東西兩洋ノ交通ノ氣運ヲ促シ、尋テ亞米利加ノ發見アリ、世界ノ形勢次第ニ一變シタルヲ以テ、其年代以來六百餘年間、大勢ニ關係アルノ事件ヲ掲ケ、以テ各國對照ノ便ニ供ス。

年代ノ標記ト相當セズシテ、稍ヤ前後スルモノハ、括弧ヲ加ヘ、以テ之ヲ區別ス、又廣ク諸國ニ關係セザルモ、交通上參照トスベキモノハ、小字ヲ以テ記ス。

<p>日本</p> <p>乙亥〔建治元年〕皇紀千九百三十四年。 數年以來、元主忽必烈汗(世祖)屢使ヲ遣シテ入貢ヲ促セ、報ゼズ、又使者ヲ逐フ元兵因テ對馬、壹岐ニ入寇ス。此年鎌倉執權北條時宗元使ヲ斬ル、後五年又元使ヲ斬ル(次欄參看)。</p>	<p>支那朝鮮等</p> <p>〔宋 德裕元年〕〔元 至元十二年〕 ◎後四年宋朝元(蒙古)ノ爲ニ滅サル。</p>	<p>歐米 西南洋等</p> <p>〔一二七五年〕 ◎威尼斯人「マルコ・ポーロ」元ニ至リ、忽必烈汗(世祖)ニ事フ(一二九一年)支那ノ内地ヲ經過シ、一二九五年本國ニ歸リ、紀行ヲ著ス、是レ日本ガ歐洲ニ知ラルハ、ノ始ナリ。</p>
<p>巳辛〔弘安四年〕千九百三十八年。 ◎元ノ大軍西邊ニ寇ス、偶、颶風</p>	<p>〔元 至元十八年〕</p>	<p>〔一二八一年〕 ◎〔一二八八年〕「オスマン」人土耳</p>

〔附錄〕◎世界形勢通覽表記

其帝國ヲ小亞細ニ建ツ。

大ニ起リ元兵大敗ス(後廿年、元兵又薩摩ニ來侵ス、擊テ之ヲ却ク)。

卯辛〔正應四年〕千九百五十一年。

〔元 至元廿八年〕
○(明年、元兵瓜哇ヲ略ス。)
○(此頃羅馬教始テ支那ニ入ル、世祖忽必烈傳教師ヲ優遇ス。)

〔二一九一年〕
○二百年以來ノ十字軍終ル。
○(一三〇〇年露國都ヲモスコ、ニ遷ス。)(一三〇二年、伊國「ナール」ニ於テ、「フラビオ・オヤ」航海用羅針盤ヲ創製ス(一三〇七年參看))

丁未〔德治二年〕一千九百六十七年。
○邊民支那ヲ侵シ其一城ヲ燒ク。
○(此頃ヨリ以後、再ビ僧ノ支那ヨリ來リ、又我國僧等ノ支那ニ赴ク者アリ。)

〔元 大德十一年〕
○(此ヨリ前六七年、緬其他西南ノ邊域ヲ擊テ之ヲ平ク。)
○(此頃高麗ニテ木製活字版ヲ以テ印行シタル書籍アリ(西洋ノ木版ニ先タツ)凡ソ百年ナリ(後活版製造ノ術ヲ日本ニ傳ヘ、佛經ヲ印刷ス。))

〔一三〇七年〕
○(明年、英國ト西葡二國トノ通商條約成ル。)
○(一三二〇年、「フロレンス」ニ於テ火藥ノ創製アリ(火藥及ヒ羅針盤、活版ハ本ト支那ノ發明ニ係ル。))

巳辛〔南朝興國二年〕二千一年。
〔北朝應曆四年〕二千一十一年。
○(足利直義商船ヲ支那ニ遣リ、什器ヲ求ム。)

〔元 至正元年〕

〔一三四一年〕
○(一三四六年、佛人始テ亞非利加ニ通商ス。)
○(同年、或ハ云フ一五三五年)英

人始テ大砲ヲ用ウ。
○(一三四八年獨逸始テ大學(「ブラギウ」)ヲ建ツ。)

南朝 正平五年 二千二十年
北朝 觀應元年 二千七十年
○(此年代凡ソ六十年ノ間、連年我邊民高麗ヲ侵掠シ、就中正平九年(二千十四年)ニハ高麗船四十餘艘ヲ奪ヒ、翌年又二百餘艘ヲ奪ヒ、正平十三年(千十八年)三百餘艘ヲ燒キ、前後各道ヲ焚掠ス、其間邦人敗走スルヲ一回。)

〔元至正十年ヨリ明永樂中〕
○(此頃ヨリ叛徒各地ニ起リ、至正廿七年ニ至リテ、漢人朱元璋ノ爲ニ滅サル、朱元璋國號ヲ改メテ明ト稱ス、蒙古人支那ヲ一統スル(一三六八年)ニシテ漢人之ヲ回復ス。)

〔一三五〇—一四一〇年代〕
○(一三五二年、土耳其人始テ歐羅巴ニ侵入ス。)
○(此頃莫臥兒王帖木兒(元ノ太祖鐵木真ノ子)西域ニ封セラシタル者ノ胤裔)兵ヲ起シ、各地ヲ征略シ、遂ニ印度ノ大半ヲ取ル(一四〇四年死)。

○元中六年(二千四十九年)、高麗人モ亦我對馬ニ寇ス。嘉吉三年(二千百三年)、朝鮮莊憲王三十二年(朝鮮ノ使來リテ和ヲ議シ、俘虜ヲ還ス。此時貿易ノ約ヲ定メ、年々船ヲ遣ル、諸侯并ニ商民亦商船ヲ遣ル、爾後幕府及ヒ諸侯等連年使ヲ派シテ佛經其他物產ヲ求ム。)

○高麗恭讓王二年(二千五十二年、一三九二年)高麗亡ビ、李成桂國王トナリ、後五年國號ヲ明ヨリ受ケ朝鮮ト改ム、是レ今ノ朝鮮王ノ始祖ナリ。
○(明太祖朱元璋洪武廿六年(二千五十三年、一三九三年)、支那人人口ヲ檢ス、六千五百四萬五千八百一十一人。)

○(一三九五年)頃獨逸人「コスタル」木版ヲ創製ス。
○(一四三八年、獨逸ニ於テ「ギウ」ン「テン」バルグ始テ活版印刷ノ業ヲ起ス、爲ニ世ノ文化ヲ助ケル少カラズ。)

○同時、邊民又船數十艘ヲ以テ明國ヲ襲ヒ、山東、浙東、温州等ヲ

○(明太祖朱元璋洪武廿六年(二千五十三年、一三九三年)、支那人人口ヲ檢ス、六千五百四萬五千八百一十一人。)

○(一四〇〇年代ヨリ一四九〇年ニ至ルノ間、威尼斯熱納亞等、伊太利ノ各市最モ繁昌ヲ極メ、一四五〇年頃「アルシエス」及ヒ「ヴェネツ」太盛ナリ。)

〔附錄〕 世界形勢通覽表

侵掠ス、明人大ニ怖レ「國家ノ患ハ倭寇ニ在リ」ト云ヘリ、明末ニ至リテ侵掠愈ヨ甚シ、當時彼國ヨリ金銀等ヲ取リ來リシ、幾許ナルヲ知ラズト云フ。

◎應永九年(二千六十二年)足利道義(前名義滿、前大將軍)明主惠帝ヨリ日本國王ニ封スルノ書ヲ受ク。

西乙「應永十二年」千六十五年。

◎明ノ勘合符ヲ得テ貿易船ヲ定ム(爾後足利大將軍屢バ使(僧徒ヲ以テ之ニ任ズ)ヲ明ニ派シ、銅錢等ヲ求ム、我國ニ存スル、永樂錢是ナリ)。

「明 永樂三年」

◎永樂中、安南及ビ交趾ヲ擊チテ之ヲ破ル。

三九〇

アリ其烟突ヲ用シ、一六〇〇年代ノ頃ニアリ。

◎一四〇四年佛國巴里ニ於テ瑞西人高帽(ハット)ヲ創製ス、小帽(キャップ)ハ一四四九年ヨリ一般ニ行ハル。

「一四〇五年」

◎一四四〇年、葡人亞非利加ノ奴隷賣買ヲ始メ。

◎一四七七年、ニユー・レンボルトニ於テ、國中時計ノ創製アリ、或ハ云フ一三〇〇年代ナリト又當時計ハ紀元前ヨリ之アリト。

◎一四五三年、羅馬東帝國亡ブ。

◎同年、佛英百年間ノ戰爭終ル。

◎一四八六年、ペーリロミウツァス喜望峰ヲ發見ス。

◎一四八九年ヨリ一五八五年(二千四百四十九年)延德元年ヨリ二千二百四十五年)天正十三年)ニ至ル(「ブルヂェス、衰ヘテ「アントウネルブ」盛ナリ)。

壬「明應元年」二千百五十二年。

「明 弘治五年」

「一四九二年」

◎「コロンブス」(熱納人)「キユバ」島ヲ發見シ、一四九四年、又亞米利加大陸ヲ發見ス、是ニ於テ世界ノ形勢頓ニ變ス。

◎此頃阿非利加ノ南方及ビ亞米利加、太平洋、南洋ニ於テ續々土地ノ發見アリ、因テ爭論ヲ起ス、ナカラシメ、一四九四年羅馬法王ノ裁可ヲ以テ、葡西兩國ノ間ニ約ヲ立テ、豫メ境界ヲ定ム。

丁「明應六年」二千百五十七年。

◎昔時ノ物價 (畿内銀匁相場)。

千九百七 米一石。木綿一疋。八十年代 三匁 (記ヲ得ズ)。

文明中 二十百三 六匁三分 一匁三分

天文九年頃 二十百 六匁三分 一匁三分

慶長、元和、寛永 二十百五十一 六匁三分 一匁六分

元祿中 二十百三 十二匁 錢凡六百文

元祿中 五十年代

「明 弘治十年」

「一四九七年」

◎葡國航海士「ラスコトド」ガマ「」始テ喜望峯ヨリ印度ニ通航ス、是ヨリ商業大ニ振起ス。

◎「カボット」北米「カナダ」ノ地ヲ發見ス。

〔附録〕◎世界形勢通覽表

八十九匁 錢一貫三百文
 天明三年 二十四年
 百三十匁 (記ヲ得ズ)
 天保四年 二十三年
 百五十匁 (同右)

午庚「永正七年」二千七百七十一年。

1700.000	天保八年	千三百九十六年(六三六年)
1110	延享元年	千四百四年(一七四四年)
100	寶曆六年	千四百十六年(一七五六年)
100	文化十三年	千四百七十六年(一七六六年)
100	明治十四年	千五百五十二年(一九一二年)

◎人口總世身加表

「明 正德五年」

「一五一〇年」

◎葡人印度ノ臥亞ヲ取リテ東洋貿易ノ中心トス(翌一五一一年、麻刺加ヲ取リテ城壁ヲ築ク、葡領中東西南洋間第一ノ繁盛市港タリ(後年英人新嘉坡ヲ領スルニ及ンデ、其繁盛同地ニ移リ)。尋テ暹羅、東埔樂ニ至リ、一五二六年始テ、支那ノ南岸ニ至リ貿易ス。|| 明嘉靖十六年(一五三七)年(參看)。

◎(是ヨリ先七百年前、亞拉比亞人南洋諸島ニ至ル)、此年葡人濠洲ノ門戸タル「マレイター」島ニ渡リテヨリ以來、歐人漸々南洋諸島ニ至ル。

◎一五一一年、西班牙人「モルカ」群島「マラッカ」ノ近海ニアリテ

午壬「大永二年」二千八百八十一年。

◎此頃内亂飢饉相繼ギ、足利幕府大ニ勢力ヲ失ヒ、二千二百卅三年天正元年(一五七三年)ニ至リテセブ。

丑辛「天文十年」二千二百十年。

◎葡人豊後ニ至ル、是レ歐人ガ日本ニ至ルノ始ナリ、此時始テ鳥銃ヲ傳フ、是ヨリ西洋貿易開ク、耶穌教我國ニ入り、彼ノ言語文

〔附録〕◎世界形勢通覽表

「明 嘉靖元年」

◎十六年(一五三七)年。葡人澳門(マカオ)ニ至リ、商館ヲ建ツ、是レ歐人が支那ニ來住スルノ始ナリ。是ヨリ六〇年ノ間ニ英、蘭、西、佛ノ各人廣東廈門ニ至リ貿易ヲ開ク(一五二〇年參看)

「明 嘉靖廿年」

「一五二二年」

◎西班牙ノ海將葡人「フェルナズ・マカラチス」即チ「マゼラン」亞米利加極南(マゼラン海峡)ヲ歴テ始テ地球ヲ周航ス。「マゼラン」ハ、フヰリッピン群島ニ於テ殺サル。

◎「ガマール」ノ印度航路發見ヨリ、木綿ノ織衣廣ク歐洲ニ行ハル。|| 是ヨリ前、木綿ハ非常ノ高價ナリシヲ以テ皆ナ毛製ヲ着セシナリ。

「一五四一年」

字亦行ハル。

卯癸〔天文二十一年〕一千二百卅年。
 ○丁酉ト云フ者印度ニ入りテ天主
 教ヲ學ビ、兼テ印度革ノ製法ヲ
 習ヒ、同十八年傳教師「ザビエ
 ル」等ヲ誘フテ歸國ス。
 ○十五年（一五四六年）葡人「ビン
 ト」等再ビ豊後ノ府内ニ來リ、
 其内亂ニ際シ、四十人ノ中廿六
 人國主ト共ニ殺サレ、「ビント」
 等十四人船ニ逃ルル「ビント」紀
 行。
 ○此頃九州各港支那商船ノ三四
 十艘碇泊セザル處ナシ、就中田
 浦、博多、阿久根、鹿兒島ノ諸
 港ハ最モ繁盛ニシテ、何レモ支
 那商船百餘艘ツ、碇泊シ、天文
 十五年（一五四六年）支那船ノ日
 本ニ來リシ總數ハ二千餘艘ニ及
 ビ、其廣シ來ル商品ハ大抵絹糸
 ノミナリ。此年（陽曆十二月五

〔明 嘉靖二十一年〕廿九年〕
 ○嘉靖年間漸チ侵セルヲ擒ニセ
 ル日本人ヨリ小銃ノ製造法ヲ習
 フ。此頃（明末）日本人連年邊海
 ヲ侵ス、明人之ヲ倭寇ト稱シ、
 大ニ怖ルル。二十年代參看。
 ○一五五〇年（嘉靖廿九年）葡
 牙人「ビント」等支那ニ至ル、
 其國禁ヲ犯シテ國ニ入ルノ罪ヲ
 以テ南京ニ送リ、懲役ニ處セラ
 ル。當時此國ハ「鞑靼」戰ヒテ敗
 軍シ、「ビント」等ハ「鞑靼」人ノ
 擒ニスル所トナリ、戰役ニ從事
 セシメラル、總將其賞トシテ物
 ヲ與ヘ、其歸國ノ請ヲ許シテ安
 南ニ接セル。港マア護送シタリ
 〓「ビント」紀行。〓

〔一五四三—一五〇年〕
 ○此頃西班牙人墨西哥ヲ征略ス。
 ○此頃未ダ汽船アラズ長途航海ニ
 用井タルハ帆船ノミニシテ、船
 舳脆弱ナレバ、航海甚ダ困難ヲ
 極メ、歐洲ヨリ印度ノ臥亞ニ至
 ルニ六ヶ月日本ニ至ルニ二年或
 ハ三年ヲ費セリ、故ニ船客中往
 々喪服ヲ携フル者アリシト云
 フ。
 ○此頃英國ノ借地料「エーカー」（四段廿四
 步）一志（金貨廿五錢）ナリ。

日）暴風アリ支那船千九百四十
 六艘、葡萄牙船廿六艘沈没シ、
 支那人凡ソ十六萬人、葡萄牙其
 他西洋人等凡ソ千五百人（内葡
 人五百人）溺死シタリト云フ
 〓「ビント」紀行。〓

亥辛〔天文廿年〕二千二百十一年。
 ○邦人始テ歐洲ニ至リ、葡國ニ死
 ス。
 ○此頃佐渡及ビ奥州ノ金山發見
 ノ風説支那地方ニ傳フ、西班牙
 人此金山ヲ得ント欲シ、遠征隊
 ヲ發遣セントス。天文廿一年（一
 五五二年）在臥亞教職「フラン
 シスコ・ザビエル」(即チ初テ
 日本ニ來リシ葡國派遣ノ傳教師
 (生國西班牙)ニシテ、天文十八
 年（一五四九年）ヨリ二年間、豊
 後及ビ山口等ニアリキ。書ヲ葡
 國教職ニ贈リテ銀島ノ日本所屬
 タルヲ以テ征略ノ企ハ無用タル
 ベシ、日本人ノ武力強盛ナレバ、
 忽ニ船ヲ奪ハシテ敗軍セントテ

〔明 嘉靖三十年〕
 ○此頃日本人廈門邊ニ至リ貿易
 ス。是ヨリ先、葡萄牙人逐ハル
 〓嘉靖十六年參看。〓

〔一五五一年〕
 ○一五五五年西班牙人「シヤン
 ド・カイタン」太平洋中ニ於テ
 群島(サンド井)チ島即チ布哇)
 ヲ發見ス。一七七八年參看。

〔附録〕 〓世界形勢通覽表

西王ニ忠告スベシト云ヘリ。時ノ政府ガ西、葡兩國人等ヲ痛ク嫌忌スルニ至リタルハ、其一此等ノ事アリシニ由レリ。

未巳〔永祿二年〕二千二百十九年。

◎傳教師「ピレラ」始テ大將軍足利義輝ニ謁ス、(同七年「ルイス・フロエス」義輝ニ謁シ、天正十九年〔一五九一年〕ノ頃「ワリグナニ」關白豊臣秀吉ニ謁ス)。

申庚〔永祿三年〕二千二百二十年。松永久秀城ヲ築キ始テ天主閣ヲ建ツ。

子甲〔永祿七年〕二千二百二十四年。明ノ商船始テ長崎ニ來リ、貿易ス。

辰戌〔永祿十一年〕二千二百廿八年。織田信長葡人ヲ京都ニ召ビ、南蠻寺ヲ建ツ(二千二百四十五年參看)。

◎(此頃日本人ノ呂宋ニ住スル者三千餘人ニ達ス、天正八年群島ヲ取ラントシ、西班牙太守ニ破

〔明 嘉靖三十八年〕

〔明 嘉靖三十九年〕

〔明 嘉靖四十三年〕

〔明 隆慶二年〕

〔一五五九年〕

〔一五六〇年〕

〔一五六四年〕

〔一五六八年〕

◎(一五七〇年)(西班牙人呂宋ヲ占領シ、「フネリッピン」ト名ヅク)。
◎(一五七七年ヨリ一五九四年ノ間ニ、蘭人「ドレトク」及「カベン」ヂッシュ「ニ人」マゼラン海峡

ヲ取ラント欲シ、策ヲ豊臣秀吉ニ献シタル事ヲ果サズ(二千二百八十九年參看)。

午壬〔天正十年〕二千二百四十二年。大友、大村、有馬ノ三侯使ヲ羅馬ニ遣ス三年ニシテ其國ニ達シ、八年ヲ經テ歸國ス(媽港ニ於テ奉使記事ヲ著シ、其地ノ庫中ニ藏ス)。

◎(天正年間蒲生氏郷數回使ヲ羅馬ニ派遣ス)。

◎此年、執權者織田信長害ニ遭フ。

西乙〔天正十三年〕二千二百四十五年。◎豊臣秀吉南蠻寺ヲ廢シ、教徒ヲ刑シ、天主教ヲ禁ズ、此後屢バ教徒ヲ刑ス。

〔明 萬曆十年〕
◎(去年再ビ祇教(天主教)ヲ傳フ)。

〔明 萬曆十三年〕

ヨリ喜望峯ニ出テ、世界ヲ一周シ、途ニ葡、西兩國ノ貿易斷ヲ破ル)。

〔一五八二年〕
◎(去年高索兵始テ西比利亞ニ出ツ(次參看)。

◎(同年荷蘭獨立ヲ布告ス)。
◎(明年羅馬法王「グレゴリー」曆法ヲ改正ス)。

〔一五八五年〕
◎(一五八六年、島嶼歐洲ニ入ル)。
◎(一五九一年、英國始テ東印度ト通商ス)。
◎(此頃莫斯科國(露國)高索部ノ兵八百餘人烏拉山脈ヲ越エテ始テ西比利亞ノ西部ニ出テ、韃靼人ヲ破リ「トボル」地方ヲ略取ス(一五九四年參看)。

〔附錄〕 ◎世界形勢通覽表

辰「文祿元年」二千二百五十二年。西南洋通航ノ朱印船九艘ヲ定ム、以後邦人ノ南洋及ヒ印度ニ至ル者多シ(二千二百五十九年參看)。

○(是ヨリ先永祿十二年)一五六九年、葡人長崎村ノ地ヲ其領主大村氏ヨリ購ヒ、大村氏之ヲ抵當トシテ葡人ヨリ金ヲ借り、償フ「能ハズシテ土地ヲ與ヘタルナリ」市街ヲ設ク商舎ヲ建ツ、此年秀吉肥前ニ至リ、此地ノ外人ニ屬スルヲ憤リ、之ヲ回復シテ我所領トナシ、新ニ長崎奉行ヲ置ク(長崎ノ橋梁中、羅馬字ヲ以テ建設ノ年代ヲ刻セルモノ、今尙ホ存ス)。

〔明 萬曆廿五年〕
○朝鮮日本兵ノ爲ニ侵撃セラル、是レヨリ日本ヲ怨ムト甚シク、數百年ヲ經ルモ之ヲ忘レズ。

〔一五九二年〕
○(前編參看)一五九四年(文祿三年)高索兵更ニ進ミテ「オビ河」ニ至リ、「トムスク」城ヲ築キ、以テ進取ノ策ヲ定ム。

西「慶長二年」二千二百五十七年。

〔明 萬曆廿五年〕
○明年羅馬「マエスイット」派ノ

〔一五九七年〕

○再ビ朝鮮ヲ撃ツ、明年豊臣秀吉歿シ、兵ヲ還ス。
○慶長元年ノ頃、烟草南洋ヨリ入り(或ハ云フ元龜中)南瓜東埔寨ヨリ、甘藷呂宋ヨリ、西瓜琉球ヨリ(或ハ云フ寛永中)傳フ。

教職「マテオリッチ」(即チ利瑪竇)「ミケロルヂエロ」ノ二人南京ニ至リ、後三年北京ニ入り、時辰儀ヲ呈ス、神宗之ヲ優待シ、信徒日ニ多シ、一六一〇年「リッチ」死ス。

〔一五九九年〕
○(一六〇一年、葡人「ゴチノ」ド「エレヂア」始テ濠洲最南「ブン」ダイエメン岬ニ至ル)一六四四年「タスマン」始テ濠洲ヲ一周ス、此時發見シタル地ニ「タスマニヤ」ノ名ヲ遺セリ、此時ヨリ新ゼーランド其他多クノ發見アリ。一六〇六年、西班牙ノ探檢者「クイロス」南大洋ニ一島ヲ發見ス(後一七七四年「クック」之ヲ新ヘブリデス群島ト名ヅク)。

己「慶長四年」二千二百五十九年。日本人支那人顏思齊等ト共ニ臺灣ヲ侵略ス。
○此年太泥國ノ信使來リ、六年安南國及呂宋國信使來リ交通ヲ求ム、徳川家康之ニ答書ヲ與フ、爾後西南洋諸國トノ交通甚ダ盛ナリ、當時邦人ノ諸國ヲ侵略スル者アリ、諸國頗ル之ニ苦ム。
○(明年更ニ西南洋渡航ノ朱印船ヲ定ム)一千二百五十二年參看。
○(此頃多ク支那産ノ生糸(白糸ト稱ス)ヲ輸入ス)日本ニ養蠶ノ事起リシハ明和安永(一七六〇年代)ニアリ。
○(葡人來商以來多ク金貨ヲ輸出

〔明 萬曆二十七年〕
○朝鮮昭敬王卅九年(慶長十年)使節ヲ日本ニ派シ、和議ヲ定ム、爾後徳川大將軍ノ更世毎ニ信使ヲ派スルヲ以テ例トス。

○(一六〇〇年、英國東印度商會ヲ設立ス)一六〇二年、荷蘭東印度商會ヲ設立ス(一六〇七年、一七〇八年、一八三四年參看)。

ス、後蘭人通商スルニ及ブテ、亦多ク金銀銅ヲ輸出ス。二、千、四、百、五、十、年、代、參、看。

巳「慶長十四年」二千二百六十九年。○有馬晴信、葡船ヲ長崎ニ撃チテ之ヲ廢ニス。

○島津義久、琉球ヲ征略ス。

○荷蘭始テ通商ス。

○堺ノ砲工大砲ヲ鑄造ス。

○五百石以上ノ兵船ヲ毀廢ス。

庚「慶長十五年」二千二百七十年。○徳川家康大船ヲ造リ、始テ墨西

○哥ニ航セシム。

丑「慶長十八年」二千二百七十三年。○伊達政宗ノ使節支倉六右衛門等

○羅馬ニ赴ク(七年ノ後、元和六年ニ至リ、歸朝ス)。

○英使來リ通商ヲ求ム、蘭人ノ抵抗甚シク、利益ナキヲ以テ、八年

○後辭シ去ル(一六一七年參看)。

「慶長、元和、寛永間」二千二百七十八年。

○山田長政、津田又左衛門等暹羅ニ至リ、天竺徳兵衛前印度ニ至ル、此頃西南洋ニ往來スル者多ク、到ル處「日本町」ヲ成ス。

○元和二年(一六一二年)、前大將軍徳川家康歿ス。

戊「寛永五年」二千二百八十八年。○濱田彌兵衛臺灣ノ太守(荷蘭人)ヲ懲ス。

○(此頃松倉重政呂宋ヲ征略セント欲ス、死ニヨリテ果サズ)。

甲「寛永十一年」二千二百九十四年。○(是ヨリ先、耶穌教ノ禁益ス嚴ナリ、信徒數十人ヲ媽港ニ放逐ス、是年朱印船ノ外航ヲ停メ、既航者ノ歸國ヲ禁テ、犯ス者ハ死刑ニ處ス、後又葡人等ヲ媽港ニ放逐ス)。

「明 萬曆三十七年」

「明 萬曆三十八年」

「明 萬曆四十一年」

「明 萬曆四十二年」

「明 萬曆四十四年」

「明 萬曆四十六年」

「明 萬曆四十八年」

「明 萬曆五十年」

「明 萬曆五十二年」

「明 萬曆五十四年」

「明 萬曆五十六年」

「明 萬曆五十八年」

「明 萬曆六十年」

「明 萬曆六十二年」

「明 萬曆六十四年」

「明 萬曆六十六年」

「明 萬曆六十八年」

「明 萬曆七十年」

「明 崇禎元年」

「明 崇禎二年」

「明 崇禎三年」

「明 崇禎四年」

「明 崇禎五年」

「明 崇禎六年」

「明 崇禎七年」

「明 崇禎八年」

「明 崇禎九年」

「明 崇禎十年」

「明 崇禎十一年」

「一六〇三年」英國蘇格蘭ヲ併シテ一國トナス。一八〇〇年參看。

「一六〇九年」

○(一六〇六年蘭人媽港ノ葡人ヲ襲フ、葡人ハ日本人一隊ノ援助ニヨリ、蘭人ヲ却ク、一六〇八年多數ノ日本人媽港ニ入ル、葡國官吏其地ヲ奪フガ爲ナラント疑ヒ、若干人ヲ殺ス。西書)。

「一六一〇年」

○一六〇八年、染衛、始テ英國ニ入ル、但シ是ヨリ前ハ物ヲ荷蘭ニ送リテ染メタルナリ。○蘭人始テ茶ヲ印度ヨリ歐洲ニ入ル。

「一六一〇—一三〇年」

○(此頃「アントウエルン」ノ商業衰ヘ、蘭都「アムステルダム」ノ商業盛ナリ)。

「一六一七年」英國艦隊ヲ以テ東洋ノ商權ヲ争ハントシ、印度ニ於テ荷蘭ノ艦隊ニ障ヘラレ、之ト交戦ス、一六二〇年、和議成リ、二國ノ東印度商會合併ス。

○(此頃蘭人瓜哇、臺灣、麻刺加等ヲ占取ス)。

「一六二八年」

○(一六三一年、カリコ、布東印度商會ノ手ヨリ始テ英國ニ入ル)。

○(一六三三年、華靴行ハル。是ヨリ前ハ、蘭製、木綿製、木製ヲ用井タリ)。

「一六三四年」

○(一六三五年、英、蘭、蘇格蘭、愛蘭ノ各市府ニ郵便ヲ設ク。一六四一年、茄非(コツヒー)英國ニ入ル)。

「一六三五年」

「一六三六年」

「一六三七年」

「一六三八年」

「一六三九年」

「一六四〇年」

「一六四一年」

「一六四二年」

「一六四三年」

「一六四四年」

「一六四五年」

「一六四六年」

「一六四七年」

「一六四八年」

「一六四九年」

〔附録〕◎世界形勢通覽表

丑丁「寛永十四年」二千二百九十七年。

島原教徒ノ亂アリ、翌年平ク、前後教徒ヲ殺戮スルノ凡ソ三十萬人、是ヨリ後外國貿易ヲ停メ、支那、荷蘭ノ二國ニ限リ、制限ヲ設ケテ之ヲ許ス、爾後外國船來リテ交通ヲ求ムルモ、一切之ヲ許サズ、船ヲ砲撃シ、人ヲ殺ス、又海外密商ノ事覺レテ刑ニ處セラルタル者數人アリ。

午庚「元祿三年」二千三百五十年。○普魯斯人「ケンフル」來ル、後ニ日本帝國史ノ著アリ、江戸ハ勿

「明 崇禎十年」

○去年韃靼國號ヲ清ト改ム○後九年（日本正保二年）二千三百〇五年（明人鄭芝龍援兵ヲ日本ニ請フ、大將軍徳川家光此ヲ機トシテ支那ヲ侵略セント欲シタルニ、明兵大敗ノ報アリシヲ以テ之ヲ止ム）○（永曆四年）日本慶安三年（二千三百〇四年）一六五〇年（明ノ太后書ヲ羅馬法王ニ贈リ、帝室ノ爲ニ冥福ヲ祈ランヲ乞フ）○清順治十七年（日本萬治三年）二千三百廿年（明亡ブ時ニ鄭ノ子孫臺灣ニ據リ、後廿三年ノ間維持ス）○（一六三八年）（我寛永十五年）清人始テ俄羅斯（露國）アルヲ知ル（一六二八年參看）○（一六八〇年）東印度商會支那ニ通商ス是ヨリ先一六五五年ノ頃荷蘭通商スト云フ）

「清 康熙廿九年」

○去年、尼布楚條約ヲ以テ清露ノ境界ヲ定メ、額里古納河ニ標碑ヲ

「一六三七年」

○（是ヨリ先一六二八年、露國高索兵「レナ河」ヲ下リ、雅庫次克ヲ占領シ、一六三九年大ニ進ミテ遂ニ西北利亞ノ極東、オコックノ海岸ニ達ス、爾後黒龍江邊ヲ侵略シ一六五一年「アルバツン」ニ於テ滿州兵ト衝突ス一六八九年ヲ看ヨ）○（一六四三年、荷蘭船長「タスマン」南太平洋ニ群島ヲ發見ス一八七四年英領トナル）○（一六四三年「トリセリ」晴雨計ヲ發明ス）○（一六五二年、英、蘭交戦）○（一六五五年、英人西班牙ノ領セ「チャマイカ」ヲ取ル、是ニ於テ西印度ニ一ノ根據地ヲ得タリ）

「一六九〇年」

○（一六八二年、露國「ペートル」位ニ即ク、爾後船艦ヲ造リ、大ニ國

論駿河ノ盛ナルヲ倫敦ノ上ニアリト云ヘリ。

丑巳「寶永六年」二千三百六十九年。○羅馬傳教師「シロテ」來ル、執ヘテ之ヲ幽ス、其人歸化シテ岡本三右衛門ト稱ス、新井白石之ニ就キテ聞ク所ヲ記シ、西洋紀聞、采覽異言ヲ著ス、是ヨリ世界ノ事稍ヤ知ラル。

「清 康熙四十八年」

建ツ此條約ハ著シク支那ニ利益アルノ條約ニシテ、專使トシテ露領ニ至リタルハ在北京傳教師「ケルビロフ」等二人ナリ威豐中（一八五八年參看）

「一七〇九年」

○（一七〇〇年）頃ヨリ一八〇〇年頃ニ至ルマデ、英國ハ世界貿易ニ於テ第一タリ）○（一七〇八年、東印度商會設立）○（一七二一年、英國ニ於テ商人ノ下院議員タルヲ拒マントスルノ企アリタレ成ラズ）

「一七三九年」

○（一七二〇年、英國ニ於テ「サウス・シー・パナルス」南海商會ノ投機ノ狂瀾アリ）○（一七三八年、露人「クリメヤ」ヲ取ル）○（一七四一年、露國船長「ペーリ」ング丁抹國人亞細亞東北端ト亞米利加西北端ノ海峽ヲ越ユ、即チ「ペーリ」ンク海峽ノ名ノ起リシ始ナリ然レモ其前日本

末巳「元文四年」二千三百九十九年。○大將軍徳川吉宗青木文藏ニ命ヲテ始テ蘭書ヲ講讀セシム。

「清 乾隆四年」

○（廿二年）一七五七年、五市場、廣東一港ニ限ル、爾來英人他ノ諸港ヲ開カントテ試ムルヲ數回、皆ナ成ラズ）

四〇四
人ノ製シタル圖ニ此海峡ヲ記ス
ル者アリ、倫敦ノ文庫ニ藏ス
○(一七五二年米人)「フランク
ン」電氣ヲ發明ス。

「一七五九年」
○(一七五二年英國ニ於テ支那陶器ヲ製ス)

「一七七一年」
○(一七六八年ヨリ八〇年マデ、英
人「クック」太平洋ヲ航スル「三
回」タイチ、及ヒ「ソサイエチ
」群島、「マキーストンガ」
「新ヘブリデス」、「エルツエ」
群島、「新カレドニヤ」等ヲ發見
ス。○一七七八年、太平洋中ノ群
島ニ至リ「サントピット」ト名ヅ
ク。○一七八〇年布哇ニ於テ「ク
ク」土人ノ爲メ殺サル。
○(此頃露國亞米利加ノ西北「アラ
スカ」ノ地ヲ占取ス。一八六八年參
看。)

「清 乾隆廿四年」
○(此頃緬甸(ビルマ)地方ヲ伐ツ、
數年ニシテ平ク。)

「清 乾隆三十六年」
○(五十二年、臺灣林爽叛ス、後
二年ニシテ平ク。)
○(安南國(一名交趾)稱ス、舊來
東京、東埔寨ト鼎立セリ)王ハ支
那ノ歷朝ヨリ封冊ヲ受ケ、清朝
ニ至リテモ臣ト稱シ、時々入朝
ス。○一六二四年(寛永元年)、葡
國傳教師(日本ヨリ放逐セラレ
タル者ナリト)安南ニ入ル、是レ
歐人ガ同國ニ入ルノ始ナリ。○一
七七八年、英領印度總督「ワイル
ン」ヘイスチングス「使チ安南ニ
遣シ、通商ノ約ヲ結バントス、時
ニ國內亂アリ、安南人使チ擊チ

「寶曆九年」二千四百十九年。
○平賀源内電氣ノ説ヲ唱フ(此頃
火洗布等ヲ製ス。)

「明和八年」二千四百三十一年。
○是ヨリ先、正徳以來(一七〇〇年
代ノ初)露人東察加ヨリ南下シ
テ千島ヲ蠶食ス、是年波蘭人日
本ニ船ヲ寄シ、北地ノ危急ヲ告
グ、幕府之ヲ察セシ、露人頻ニ侵
略ヲ逞シ、幾バクモナク樺太ノ
半ヲ占取ス(二千四百六十六年參看)
○(安永九年(一七八〇年)英國船
長「クック」殺サル、ノ後副船長
船ヲ指揮シ「マレー」ヨリ日本ニ
船ヲ寄セントシタレバ、其危險
ナルヲ云フ者アリテ之ヲ止メ、
直ニ廣東ニ赴キタリト云フ
一七八八年參看。)

「一七七六年、米國獨立ヲ公布
ス、因テ英國ト交戰數年、一七八
三年英國之ヲ公認ス。)
○(一七七六年、英人「アダム・スミ
ツ」國富論ヲ著ス。)

「一七九〇—一八〇〇年代」
○一七九三年、傳信標行ハル(一八
五九年電信機ノ條參看。)
○一七九五年、露、普、奧ノ三國波
蘭ヲ滅シ、其地ヲ三分ス。
○一七九七年、那破命埃及ヲ征ス。
○英將「テルソン」佛艦ヲ「アホ
ルカイ」ニ破ル。○一八〇〇年那
破命埃兵ヲ「マンゴ」ニ破ル。○
一八〇三年佛國那破命帝ト稱
ス、威歐洲ニ振フ。(一八二二年參
看。)
○一八〇〇年、英倫愛蘭二國立法
上ノ聯合ヲナス。

「一八〇六年」
○(一八〇七年、英人「フルト」

テ之ヲ却ク。○數年ノ後佛國傳教
師「バウム」安南ニ至リ、一七八
七年其太子ヲ導キテ佛國ニ赴
キ、佛王「ル」第十六世ニ會セ
シメ、一七九〇年ヲ以テ歸着ス、
(次開。)

「清 乾隆、嘉慶中」
(前開ヨリ)此時安南ニ兵ト貨幣ヲ假
シ、其報酬トシテ安南ノ地ヲ佛
國ニ割與スルノ條約ヲ結ベリ、
然ルニ佛國革命ノ亂起リ國王
害ニ遭ヒシカバ、歸着ノ時、僅ニ
佛國將士數名ヲ伴ヘリ。○安南王
ハ「バウム」及ビ歐人(英、佛、
愛)十數名ノ力ヲ假リテ、一八
〇九年ニ北方ノ東京ヲ、一八
〇九年ニ東埔寨ヲ征服ス。東埔
寨ハ九〇〇年代ニ強盛ニシ、東埔
シテ屬邦トナシタル「ア
(以下一八五八年ノ條ニ見ユ)

「清 嘉慶十一年」

「寛政、享和中」三千四百五十六年代。
○(三千九百九十七年參看)是ヨリ先支那
荷蘭貿易ノ料ニ供スル銅ノ欠乏
ニヨリ、屢バ貿易ノ定額ヲ減ズ、
寛政二年(一七九〇年)更ニ支那
ノ船數ヲ十艘、銀額二千七百四
十貫目(最初七十艘、六千貫目)
ニ、又荷蘭ノ船數ヲ一艘(最初七
艘乃至十二艘、但シ金額ニ定限
ヲ立テズ)ニ減ズ、是ヲ減額ノ最
終トス。
○寛政中伊能勘解由忠敬日本實測
圖ヲ製シ、始テ經緯度數ヲ記ス。
○寛政中泉州貝塚ノ岩崎喜兵衛望
遠鏡ヲ製ス。

「丙 文化三年」二千四百六十六年。
○(二千四百卅一年參看)是ヨリ先露船

屢バ蝦夷ニ來ル、幕府海防ノ令ヲ布ク、露人通商ヲ許サシムルヲ慣リ、此年并ニ翌年樺太ト蝦夷ニ寇ス。

○是ヨリ先、英人通商ヲ求ムルヲ再三、幕府之ヲ許サズ、是年長崎市街ヲ剽掠シテ去ル。
○間宮林藏滿州ヲ探檢シ、黑龍江岸ニ至リテ翌年歸ル。

○國界并方里 (明治廿四年調)
東 千島國占守島
西 琉球國與那國島
南 琉球國波照間島
北 千島國アライト島
全國 二四、七九四方哩 (一四七、六五五方哩)

〔清 嘉慶十三年〕

汽船ヲ發明シ、一八一一年、始テ之ヲ用ウ、其船三馬力ナリ。

〔一八〇八年〕
○(一八一二年、英米二國開戰。)
○(一七九七年參看)一八一二年、那破命露國ヲ攻メ、莫斯科ニ入り、敗レテ還ル。一八一四年那破命帝位ヲ廢セラレ「エルバ」島ニ流サレ、一八一五年、那破命佛國ニ歸リ、帝位ニ復ス。○英將「ウエルリント」佛兵ヲ「ウチアイトルロ」ニ破ル(那破命「セント・ヘレナ」島ニ流サレ、一八一一年、配所ニ死ス)○露、澳、普ノ三帝巴里ニ於テ神聖盟約ヲ結ブ(後歐洲諸國(英ヲ除ク)ノ帝王之ニ加入ス)。
○(一八一四年、倫敦ニ於テ始テ瓦斯燈ヲ點ス)。
○(一八一九年、英人瓜哇ノ蘭人ヲ

西乙 〔文政八年〕二千四百八十五年。○異船打拂ノ令ヲ布ク(天保十三年(一八四三年)ニ至テ廢ス)。

〔清 道光五年〕

逐ヒ、之ヲ取ル)。
○(一八二一年、智利國獨立)。
○(一八二三年、露土大戰)。
○(一八二四年、英人新嘉坡ヲ略ス) (是ヨリ先、一七八八年漢洲ニ着手ス)。
〔一八二五年〕
○葡國南米「ブラシル」國ノ獨立ヲ承認ス。
○(一八二八年「ウルガイ」共和國獨立)。
○(一八三〇年、白耳義國荷蘭ヨリ分離シテ獨立ス)。
○(一八二八年、露土交戰)○一八三〇年ヨリ四〇年マデ、西班牙葡葡牙交戰○一八三〇年ヨリ四十七年マデ、佛國「アルジェ」ニ交戰)。
○(一八二九年、「コレラ」病始テ歐洲ニ流行ス)。
○(一八三〇年英國「リバイプ」ル「マンチ、エスター」間遠車鐵

己〔天保十年〕二千三百九十九年。
 ◎渡邊登(華山)、高野長英外事ヲ論スルノ書ヲ著スノ罪ヲ以テ獄ニ繋ガル。
 ◎天保中、尾張ノ醫士吉雄俊藏(後常三)雷粉(雷管ニ裝置スルモノ)ヲ製ス、此レ日本ニテ之ヲ製スルノ始ナリ。

〔清 道光十九年〕
 ◎阿片烟輸入ノ禁乾隆以前甚ダ嚴ナリシニ、嘉慶以後其禁漸ク弛ミ、輸入益ス多シ、是ニ於テ再ヒ禁令ヲ布キ、廣東總督林則徐阿片烟二萬兩ヲ燒ク、明年英人廣東等ニ入寇シ、廿二年(一八四二年)江南ヲ陷ル、此年價金二千百萬弗ヲ與ヘ、香港ノ地ヲ割キテ、英人ト和シ五港ヲ開ク(咸豐中一八六〇年參看)。

◎道創成一八三五年、倫敦鐵道始テ成ル。
 ◎一八三四年、東印度商會免許ノ期滿チ、之ヲ廢ス(一六〇〇年參看)。
 ◎一八三八年、寫眞術發明。
 〔一八三九年〕
 ◎一八四〇年英國「ローランド・ヒル」ノ低料郵便法始テ行ハル。

甲〔弘化元年〕二千五百四年。
 ◎荷蘭王使ヲ遣シ、世界ノ形勢ヲ説キ、鎖國ノ得策ニ非ルヲ忠告ス(後六年嘉永三年再ヒ使ヲ遣シテ、米國ノ通交ヲ要迫スベキヲ告グ)。

〔清 道光廿四年〕
 ◎廿七年(一八四七年)英國及ヒ瑞典、諾威ト通商條約ヲ結ブ。

〔一八四四年〕
 ◎一八四五年、「ジョン・フランシリン」北西航路探檢ノ途ニ上ル。
 ◎一八四六年、米墨二國開戰。
 ◎一八四八年、佛國革命ノ亂起ル。

乙〔嘉永六年〕二千五百十三年。
 ◎近年各國ノ使船前後ニ來リ、交通ヲ求メタレ、皆ナサレズ、是年米使「ベリ」軍艦數艘ヲ率井テ來リ、迫リテ交通ヲ求メ、明年決答セシメテ約ヲ得テ一タヒ去ル(次欄參看)。

〔清 咸豐三年〕

〔一八四九年、佛兵羅馬ヲ陷ル〕
 ◎一八四七年、「カリフォルニア」金山發見。
 ◎同年、鐵道熱ノ爲ニ恐慌ヲ起ス。
 ◎一八五一年、濱洲大金山發見。
 ◎一八五一年始テ世界博覽會ヲ倫敦ニ開ク。

丙〔安政中〕二千五百十四―十九年。
 ◎元年假ニ米國條約ヲ定メ同五年(一八五八年)ニ至リテ五國條約成リ、(皆ナ一八七二年ヲ以テ改正ノ期トス)二百廿餘年來ノ鎖國政略遂ニ破ラル。

〔清 咸豐四年―九年〕
 ◎八年、米佛二國ト通商條約ヲ締結ス、爾後其他ノ各國ト條約ヲ締結ス。
 ◎咸豐中(一七七一―一八〇〇年代)參看安南國耶穌教徒(佛人)ヲ慘刑ニ處ス、一八五八年西班牙ノ仲裁ヲ

〔一八五一年〕
 ◎英佛ノ艦隊我北隣東察加「バートルボスタ」港ヲ砲撃ス(此時露土ノ戰爭アリシニ由ル)。
 ◎佛國大洋洲ノ「ニユニ・カレドニヤ」島ヲ占領ス。
 〔一八五四―五九年〕
 ◎一八五四年、米國政府「メシラ」ノ大澤地方及ヒ「アリソナ」ヲ墨西哥ヨリ買收ス(一千萬弗)是ヨリ先、又亞米利加中ノ各地ヲ佛、西、墨ヨリ買收セリ。

〔附錄〕◎世界形勢通覽表

元年「日ノ丸」ヲ以テ全國船舶ノ
旗章ト定ム。(尋テ諸藩ノ軍艦製
造ヲ許シ、文久元年ニ至テ、諸民
ノ大船所有製造ヲ許ス。)
四年蕃書調所創立、是レ帝國大
學ノ起原ナリ。
此頃外國人屢バ殺害ニ遭フ。

中「萬延元年」二千五百二十年。
使節米國華盛頓ニ至リ、條約ヲ
交換ス、是レ開國後使節ヲ海外
ニ派遣スルノ始ナリ。(後二年使
節ヲ歐洲ニ派遣ス。)
同時咸臨丸米國ニ至ル是レ日本
軍艦ガ太平洋ヲ航スルノ第一大
ナリ。(二千五百三十五年参看)

以テ、安南其南方六州(東埔寨地
方)ヲ佛國ニ割與ス、後佛國其政
廳ヲ柴昆ニ置ク(一八七四年、一八八
三年参看。)
一八五八年、滿州ニ於ケル愛
條約ヲ以テ黑龍江ノ左岸ヲ露領
トシ、烏蘇里江ヨリ東海ニ至ル
海岸一帶ノ地ヲ以テ清露ノ共轄
地トス、爲ニ清廷頗ル不滿ヲ抱
ケリ(一八六〇年参看。)

「清 咸豐十年」
是ヨリ先咸豐六年以來、英ト隙
アリ、廣東東人英節ヲ焚キ、又天
津守兵英佛公使ヲ襲フ、九年英
佛共ニ支那ヲ攻メ此年遂ニ北京
ヲ陷レ、圓明園ヲ燒キ、多ク財貨
ヲ掠ム、帝熱河ニ逃ル、英佛ト和
ヲ議シ、償金一千二百萬兩ヲ與

四一〇
一八五四—五年「クリミア」戦争
露國ト土、英、佛、伊ノ聯合兵
ト黒海ニ戦フ。一八五五年ノ維
納會議ヲ以テ和約ヲ定ム。
一八五七年露國樺太(サガリン)
蠶食ニ着手ス。
一八五九年「サルヂニヤ」王佛帝
ト聯合シテ埃國ト戦ヒ伊國ヲ一
統ス。
米國人「モリス」電信機ヲ發
明ス、一八五九年佛國政府之ニ
八萬弗ヲ與ヘテ其發明者タルヲ
公認ス(翌年歐洲諸國各賞ヲ與
ヘテ之ヲ公認ス)。

「一八六〇年」
(咸豐中)一八五八年参看)北京ノ條約
ヲ以テ韃靼東部ノ黑龍江、烏蘇
里兩地方九十萬三千餘方哩ヲ露
領トス、是ニ於テ露國ハ亞細亞
ノ東北部ヲ全領シ、境土ヲ朝鮮
ニ接スルニ至レリ。是レ英佛北
京政戦ノ時ニ處シテ露國公使ノ

露艦對馬ニ駐泊ス(此年英佛北
京ヲ陷ル)英艦亦對馬ニ至リ、
其舉動ヲ窺フ、幕府吏ヲ派シ、英
艦長ト共ニ論シテ退去セシム。

一八三
九、七港ヲ開ク(道光中)一八三
九年(参看)。

調停スル所アリシヲ以テ、之ヲ
恩トシテ威迫シ、巧ニ此廣大ノ
土地ヲ奪ヒシナリ。浦潮港此時
ヨリ開ク。
(一八六二年、米國廢奴ノ事ヨリ
シテ南北戦争起ル。一八六五年
和成ル)。

亥「文久三年」二千五百廿三年。
(去年、外國渡航ノ禁ヲ解ク。)
此年五月十日ヲ以テ攘夷ノ期限
トナス、期ニ至リ、長藩下ノ關
通航ノ外船(米、佛、蘭)ヲ砲撃
ス(明年四國(英國之ニ加ハル)
ノ船艦下ノ關ヲ攻撃シ、償金三
百萬弗ノ約ヲ以テ局ヲ結ブ)。
七月英艦鹿兒島ニ至リ、生麥殺
害ノ賠償ヲ求メ、之ニ應ゼザル
ヲ以テ戰ヲ開キ、市街ヲ焚ク(償
金五十四萬弗ヲ前後ニ與フ)。
開港以來國內紛擾ニヨリ、鎖港
ノ談判ヲ試ム、固ヨリ成ラズ。

「清 同治二年」
(是ヨリ先十五年以來、廣東教徒
洪秀全等叛シ、「太平」ト號シ、明
ノ恢復ヲ唱ヘ、明代ノ風俗ニ復
ス、清人之ヲ長髮賊ト稱ス、其
勢頗ル盛ニシテ遂ニ上海ヲ破
ル、去年清廷英佛米ノ援兵ヲ假
リテヨリ頗ニ勝ヲ得、明年洪秀
全自殺シ、同治八年各地ノ叛徒
全ク平ク)。

「一八六三年」
英國「ホルチオ島」ノ一部ヲ買収
ス。
普、埃聯合シテ丁抹ヲ攻ム。
(一八六四年ヨリ七〇年マテ、伯
拉西爾ト巴拉藝ト交戦)。
(一八六五年、米國大統領リンコンハ統殺
ニ遭フ)。

〔附録〕◎世界形勢通覽表

○此年ヨリ英佛ノ兵各千五百人横濱ニ屯在ス(明治八年ニ至リ退去ス)。

○(明年幕府長藩ヲ征ス、佛國兵ヲ幕府ニ假スノ意アリ(時ニ那破命第三世佛帝タリ)小栗上野介敵藩討滅ノ費ニ充ツル爲、佛國公使「ロッセ」ト議シテ六百萬弗ヲ佛國ニ假ルノ事ヲ圖リタルニ、慶應三年ニ至リ、佛廷之ニ應セザルノ報達シ、幸ニ外兵ヲ假ルノ事ナクシテ止ム)。

卯丁〔慶應三年〕二千五百二十七年。○徳川昭武等佛國博覽會ニ赴ク、是レ我國ノ外國博覽會ニ會スルノ始ナリ。

○開國以來人心ノ變動殊ニ劇シク其餘響トシテ七百年來ノ幕府政治廢セラレテ他ノ政治ニ移ル(明治四年廢藩)。

〔清 同治六年〕朝鮮李氏七十六年。○朝鮮人佛人ヲ殺ス、佛人因テ朝鮮ヲ攻ム(一説ニ先王ノ陵ヲ發キタリト)。(次欄參看)

〔一八六七年〕○(去年、普、伊聯合シテ埃ヲ攻ム)。

○(此頃福澤某西洋事情ヲ譯述シ、大ニ行ハル世人ノ智見ヲ開キタルノ効少ナカラス、

以テ邦人ノ思想ハ甚ダ幼稚ナリトシテ察スベシ)。

長戊〔明治元年〕二千五百廿八年。○外國公使始テ天皇陛下ニ謁見ス。

○東西兩政黨ノ戦亂アリ。

○(明年、飢饉、南京米ヲ輸入ス)。

○(此頃舊幕府ノ士榎本釜次郎蝦夷ノ地若干ヲ英人ニ賣リシ(或ハ貸セシ)トテ英人來リテ三萬坪ヲ開墾セリ、政府ハ英國公使ト談判ノ末、四萬圓ヲ彼ニ與ヘテ其地ヲ我ニ復シタリト云フ)。

〔清 同治十年〕朝鮮四百八十年。○日本欽差大臣北京ニ至リ、修好條約ヲ締結ス、明年日本領事來駐シ、十三年公使來駐ス)。

〔一八七一年〕○(去年佛帝那破命第三世普國王(後ニ獨逸帝)ウヰルヘルム第一世)ニ對シ戰ヲ挑ミ、佛軍大ニ敗レ、那破命擒トナル、此年和約ヲナシ、往年取ル所ノ「アルサ

〔清 同治七年〕朝鮮四百七十七年。○(朝鮮四百七十九年(一八七〇年)米國船韓人ノ砲撃ヲ受テ、米人因テ港口ヲ砲撃シテ去ル)。

○(此頃朝鮮國中ニ碑ヲ建テ「洋夷侵犯非和則戰主和者賣國之賊戒我萬年子孫」ノ廿一字ヲ刻ス、爲ニ國民攘夷ノ意氣ヲ激勵セリ)。

後明治十五年、花房公使ノ談判ヲ以テ此碑ヲ撤去シタリ)。

〔一八六八年〕○「サマルカンド」露國ノ版圖ニ入ル。

○米國政府「アラスカ」ノ地ヲ露國ヨリ買收ス(七百廿萬弗(一七七〇年代參看)。

○(一八六九年、蘇士運河開鑿成ル)。

未辛〔明治四年〕二千五百卅一年。○條約改正ノ期、明年ニアルヲ以テ、大使歐米ニ赴ク(二年ヲ經テ歸朝)。

○朝鮮ヲ襲撃セント企ツル者アリ、捕ヘラル。

〔附録〕◎世界形勢通覽表

○長崎上海間。并ニ長崎浦潮港間ノ海底電線ヲ設ク(丁抹國大北會社)。

○(此頃ヨリ歐米ニ赴ク者多ク(女子亦留學ス)歐米ノ事物最モ行ハシ、食衣住ニ至ルマデ歐米風ニ習フ者年々増加ス、同時ニ自尊自重ノ舊風俄然トシテ一變シ、外國尊崇トナリ、再變シテ自屈自侮ノ陋風漸ク起ル、開港地ニ至リテハ此陋風最モ甚シ。

申壬「明治五年」二千五百三十二年。

○東京横濱間ノ鐵道成ル、我國鐵道アル是ヲ始トス(始テ同處ニ電線ヲ設ケタルハ明治二年ニアリ)。

○(秘露國「マリヤルズ」船ノ賣奴ヲ解キテ支那ニ還付ス、秘露國異議アリ、露帝ノ仲裁ヲ仰ク(明治

ス「ロレンス」二州ヲ普國ニ返シ、償金九億五千萬弗ヲ與フ、其二年ヲ出ズシテ此大金ヲ悉皆拂渡セシハ世人ノ驚駭スル所ニシテ、十年ヲ出ズシテ其金流シテ佛國ニ歸リタリト云フ(普國ノ先王「フレデルヒク」ヘルム三世)「ウヰルヘルム」第一世「ノ兄」ノ時、那破命ノ爲ニ破ラレ、城下ノ盟ヲナシ、所領ノ半ヲ削ラレ、償金一億「ターラー」(凡ソ金貨七千萬圓)ヲ奪ハレタルヲアルナリ)。

「清 同治十一年」(朝鮮 四百八)

「一八七二年」

○(是ヨリ先一八六一年、米國南黨ノ軍艦「アラバマ」號英艦ノ爲ニ損害ヲ受ケタルヲ以テ、各國委員ノ仲裁ヲ受ケ、此年裁決アリ、英國ヨリ償金一千五百五十萬弗ヲ米國ニ與フ)。

八年ニ至テ日本ノ處置不當ニ非ズト裁決ス)。

○(此頃濫ニ外人ヲ聘用スルノ風行ハル)。

成甲「清 同治十三年」(朝鮮 四百八)

○上海江灣間ノ鐵道成ル(後清廷異議起リ、之ヲ外人ヨリ買收シテ一タビ毀廢ス(光緒中一八九〇年參看)。

「一八七四年」

○佛國安南ト條約ヲ締結ス(安南國嗣德廿七年)外寇アル佛兵ヲ假ス事、混合裁判制定ノ事等アリ(一八八三年參看)。

「明治八年」二千五百三十五年。

○樺太全島ヲ露國ニ與ヘ、千島トシ、局ヲ結ブ。

亥乙「清 光緒元年」(朝鮮 四百八)

○清國秘露國ト條約ヲ締結ス。

「一八七五年」

○荷蘭亞珍ヲ奪ツ。

○換フ。朝鮮人我軍艦ヲ砲撃ス（明年和議成ル）。
○筑波艦米國ニ至ル、是レ日本軍艦ノ同國ニ至ル第一次ナリ（二千五百二十年參看）。
○（西那隆盛等國權派ノ朝ヲ去リテヨリ、内治派專ラ政權ヲ執ル、十年、隆盛其門下壯士ノ爲ニ殉死ス、是ヨリ内治派益ス專横ヲ極ム。）

「明治十二年」二千五百三十九年。
○琉球藩ヲ滅シ沖繩縣ヲ置ク。
○在橫濱外國（英佛）郵便局ヲ閉ヂ、其事務ヲ日本ニ交付ス（十年萬國郵便條約ニ加入セリ）。
○地學協會創立

○雲南省ニ於テ英人「マーガリー」虐殺ニ遭フ、明年李鴻章ト「ウエイド」(英國公使)ノ條約ヲ以テ扶助料廿萬兩ヲ遺族ニ交付スル事、謝使ヲ英國ニ派遣スル事其他ノ交際通商上數件ノ讓與ヲ約ス。

卯己「清 光緒五年」(朝鮮四百八十八年)
○去年支那飢饉、日本人中米穀(金三萬圓)ヲ賑恤ス。
○(一八八一年改訂清露條約ヲ以テ伊犁ノ地ヲ支那ニ還屬シ、兵費及ヒ扶助費トシテ九百萬留即

四一六
○(一八七六年米國獨立百年ニ當リ、費府ニ萬國博覽會ヲ開ク)。
○(一八七六年東歐「ブルガリヤ」ノ亂起リ、露土交戰翌年ニ涉ル、一八七八年此事件ニ關シ、伯林會議ヲ開キ、列國ノ全權會合ス、英國首相「ベコンズ」ヲ非ノルド伯」ノ名歐洲ニ高シ)。
○(此頃英國政府大ニ「スエズ」運河ノ株式ヲ買收ス。是レ事アルニ當リテ運河開閉ノ權利ヲ握ルガ爲ニ「ベコンズ」ヲ非ノルド伯」閣ガ豫メ議院ニ諮詢セズシテ決行シタル所ニシテ、輿論亦其英斷ヲ稱贊ス)。

「一八七九年」
○英國阿富汗斯坦及ヒ「ズール」(亞非利加)ヲ擊ツ(一八七三年及ヒ一八八五年ヲ看ヨ)。
○(智利、白露二國開戰一八八三年講和)。
○瑞典人「ノルデンスキヨルド」

○(明年荷蘭政府ニ要求シテ日本在留ノ公使ヲ歸國セシム、其條約改正案ヲ洩シタルニ由ル)。
○(此頃南洋「ボルネオ」島ノ北西「サラワック」ノ地(廣サ九州ヨリ稍ヤ大ニシテ良好ノ地ナリ)ヲ八十萬圓ニテ日本ニ買ハントテ謀リタル者アリタレハ政府ニ異議起リテ止ム、幾バクモナク英國ノ所領トナル)。

「明治十五年」二千五百四十二年。
○七月廿三日朝鮮ノ事變アリ、韓人日本公使館ヲ侵襲シ、數人之ニ死ズ、公使花房義質一タヒ歸國シ、八月再ヒ京城ニ至リ、償金五十萬圓(年賦)、遺族扶恤金五十萬圓ヲ納ル、ノ約ヲナス(十七年、四十萬圓ヲ恕ス)。
○(明年米國政府下、關償金ノ内米金七十八萬五千弗ヲ日本ニ還送ス)。

壬午「清 光緒八年」(朝鮮四百九十一年)
○米韓條約成ル。尋テ清韓通商條約成ル(翌一八八三年朝鮮ト英國及ヒ獨逸ト、一八八四年伊國及ヒ露國ト、一八八六年佛國トノ條約成ル)。
○(此頃清國留學生ヲ西洋ニ派遣ス)。
○(光緒七年各地ノ電線架設ニ着手ス)。

○(明年荷蘭政府ニ要求シテ日本在留ノ公使ヲ歸國セシム、其條約改正案ヲ洩シタルニ由ル)。
○(此頃南洋「ボルネオ」島ノ北西「サラワック」ノ地(廣サ九州ヨリ稍ヤ大ニシテ良好ノ地ナリ)ヲ八十萬圓ニテ日本ニ買ハントテ謀リタル者アリタレハ政府ニ異議起リテ止ム、幾バクモナク英國ノ所領トナル)。

「一八八二年」
○(一八八〇年露帝「アレキサンドル第二」盧無厭ノ爲ニ弑セラル。一八八一年米國大統領「ガーフィールド」私怨ヲ以テ銃殺ニ遭フ)。
○「ウエガー」號ヲ以テ北洋ヲ周航ス。

○(一八八二年)
○安南王ヨリ危急ノ報ヲ得テ、清廷兵ヲ安南ニ遣シタルハ、佛人同地ヲ侵略スルノ意ナキヲ證明シタルヲ以テ退軍セリ(一八八三年、佛國安南ヲ擊チテ其保護國トナス一八七四年、一八八四年參看)。

○(此頃政府大ニ獨逸ノ文物ヲ誘導獎勵ス。參議伊藤某憲法取調トシテ獨逸ニ至ル。)

〔明治十七年〕二千五百四十四年。
○十二月四日、又朝鮮ノ事變アリ、日本人四十人之ニ死ス、公使(竹添)外務卿ノ内訓ヲ受ケ、金、朴等ト共ニ企圖スル所アリ、清人之ヲ妨グ、王竊ニ援テ露國ニ求ム、公使僅ニ免シテ歸ル金朴等亦日本ニ遁ル(明年一月京城條約ヲ以テ償金十三萬圓ヲ日本ニ納シム。)(十八年參看)

〔明治十八年〕二千五百四十五年。
○北京條約ヲ以テ在韓日清兩國ノ兵ヲ撤スルヲ約ス。
○朝鮮ニ事ヲ擧ゲント企ツル者アリ、數十人捕ヘラル(後刑ニ處セラル)。

甲〔清 光緒十年〕朝鮮四百九十年。
○雲南、貴州ノ電線ヲ架ス(去年佛國ト安南ノ事アリ)。
○日本政府長崎ヨリ對馬ヲ經テ朝鮮ニ電線ヲ架ス、是レ朝鮮ニ電線アルノ始ナリ(後又京城釜山ノ間ノ線ヲ架セントセシニ、支那政府其業ヲ興セリ)。

乙〔清 光緒十一年〕朝鮮四百九十年。
○去年諒山(國境安南ニ接スルノ地)ニ於テ清佛兩兵爭鬪ス、佛廷ハ清廷ヲ責メ、軍艦ヲ以テ福州等ヲ攻ム、此年六月巴里ニ於テ和議成ル。

〔一八八四年〕
○萬國仲裁講和會ヲ瑞西國「ベルン」府ニ開ク。
○交趾ノ知事(佛國ヨリ派遣)東埔寨王ヲ強迫シテ條約ニ署名セシム。
○獨國「ニユーギニヤ」ヲ取ル

〔一八八五年〕
○英艦一時朝鮮巨文島(「ハミルトン」港)ニ占據ス、露國之ヲ妨グ(露國ハ東方ニ冬間不凍ノ港ヲ得ント常ニ望メリ)。
○中央亞米利加各共和國ノ戰亂アリ。
○阿富汗境界ニ關スル英露兩國ノ

〔明治廿一年〕二千五百四十九年。
○廿一年、暹羅國ト通商條約ヲ締結ス。
○廿二年、在米公使墨西哥國ト條約(對等)ヲ締結ス。

○是ヨリ先、屢バ條約改正ヲ試ミタレド未ダ成ラズ、廿年及廿二年殆ト成ラントシテ復タ中止ス、其改正案タル讓歩自屈ノ甚シキヨリ、案ノ世ニ洩レテ痛ク輿論ノ攻撃ヲ受ケタルニ由ルナリ。
○此頃外尊內卑、詭他自侮ノ陋風殊ニ上流(所謂)ノ間ニ益ス流行ス。
○歐洲殊ニ獨逸ノ奢侈品多ク輸入ス。

〔清 光緒十三年〕朝鮮四百九十年。
○(比年米國等ニ於テ、支那人排斥ノ事最モ烈シ)是レ支那ノ厭フベキニ由ルト云フト雖モ、實ハ之ヲ畏ル、ナリ)。

紛議定マル
○緬甸國王英將ニ降伏ス、(明年緬甸ノ交渉ニツキ清英二國ノ間ニ條約ヲ定ム)。
〔一八八七年〕
○一八八九年巴里ニ萬國博覽會ヲ開ク。
○一八八九年「ニカラグア」運河會社ノ設立アリ、太平太西兩洋ノ航路開鑿ニ着手ス、豫定費額總計一億弗。

○翻譯法律ノ發布愈ヨ繁シ。

○明治廿三年「二千五百五十年」
○去年憲法ヲ發布シ、此年ヨリ帝國議會ヲ開ク。
○米穀ノ供給乏シ、外國米數百萬石ヲ購入ス。

庚「清 光緒十六年」〔朝鮮四百九十八年〕
○〔此頃支那北部ノ鐵道成ル。〕

〔一八九〇年〕

○「明治廿四年」二千五百五十一年。

○露國皇太子來遊、滋賀縣大津ニ於テ巡查ノ爲ニ要撃セラレ、微傷ヲ被ル、全國騷然タリ。
○東邦協會創立。
○葡國領事ノ在留ヲ止ム、因テ廿五年勅令ヲ以テ、同國條約中治外法權ニ關スル條款ノ無効ニ歸シタルヲ布告ス。

卯辛「清 光緒十九年」〔朝鮮五百年〕
○朝鮮李氏五百年ニシテ滅亡ノ豫言ヲ信スル者アリ、人心洶々タリ。

○「一八九一年」
○西比利亞鐵道起工（明年鐵道會議ヲ以テ幹線ノ費額ヲ一億五千萬留ト定メ、竣工八年ヲ期ス）。
○〔此頃葡國政府財政ノ困難ニヨリ、媽港及ビ「ターモル島東部」〔大洋洲「クヰンズランド」ノ北ニアリ〕ヲ賣却スルノ議アリ。〕

○「明治廿六年」二千五百五十二年。
○陸軍中佐福島安正騎馬ニテ西比利亞ヲ旅行ス。

巳癸「清 光緒十九年」〔朝鮮五百二年〕
○朝鮮事變ノ風説アリ、各國軍艦同國ニ至ル、就中清國軍艦最モ

○「一八九三年」
○〔去年復タ白耳義ニ於テ各國貨幣會議アリ其結果ヲ得ズシテ閉

○郡司成忠（豫備海軍大尉）同志ヲ率テ千島ニ移住ス。

○植民協會創立。
○兩院議員中其他非内地雜居論ヲ唱フル者アリ。
○比年銀貨ノ下落愈ヨ甚シ、然レ邦人之ンガ利害ニ注意スル者少シ。
○「世界ニ於ケル日本人」刊行。

迅速ナリキ朝鮮ハ愈ヨ東方ノ「バルカン半島」タルノ形勢アリ

○比年各國銀價愈ヨ下落ス。
○米國「シカゴ」ニ世界「コロソニア」博覽會ヲ開ク。
○布哇帝國滅ブ、時ニ日本軍艦布哇ニ至ル、米人其異國アルヲ疑フ。此頃日本ハ「ベリユ」群島（西班牙領、北太平洋ニアリ）ヲ占領セリトノ虛傳アリ、西班牙人ヲ驚カシタリ、是ヨリ先明治廿四年日本政府ガ勅令ヲ發シテ小笠原島ノ南ナル硫黃島ノ所屬名稱ヲ定メタルモ、同ク訛傳アリ、亦以テ外人ガ日本ノ眞情ニ暗ク、其疑フ所實ニ遠キヲ知ルベシ。
○暹羅國始テ鐵道ヲ敷設ス。

◎事實出處。

(本文中ニ記スル者ハ問々之ヲ略ス。)

- 緒言 「徳川家光支那侵略云々」古文書。「樺太買収云々」黒龍江上股艦(東邦協會報告)。「南洋一島買収云々」青木周藏演說(明治廿五年)。「百濟新羅ヲ征服シテ我ニ臣民タラシム」高句麗好太王碑文。

○第一部 日本ト歐米トノ交渉。

- 交通事歴。 Voyages and Travels of Marco Polo. Hildebr's "Japan as it was and is." (一八五六年倫敦刊行)「外交志稿通航一覽」(徳川幕府撰)開國起原、外蕃通書(近藤守重)「增譯采覽異言新井白石、山村昌永」、海外新話(森島中良)「徳川十五代史、長崎實記新撰年表」Adams-History of Japan. (イ)一八五六年米國官版日本記事、開國起原(勝安芳)「マニール・ウエニスマー」ノ公書、等。
- 我國ニ於テ近古西洋貿易云々。 Hildebr's "Japan" (イ)一八五六年米國官版日本記事、(ロ)筑紫の摘草(兼松某)「異國日記、折たく柴之記(新井白石)」Alcock-Three Years in Japan. 外交志稿、日本外交起原史、長崎拾芥、等。
- 耶蘇教嚴禁并ニ鎖國ノ原因。(イ)日本西教史、鹽社遺厄小記(高野長英)、南蠻寺興廢記、Adams-History of Japan. 日本西教史、一八五六年米國官版日本記事、中古外交志所引長崎實錄大成、大久保家記別集等、徳川十五代史、(ロ)Hildebr's "Japan as it was and is."「ザマリヨ書翰記」等。
- 西洋文物云々。 日本西教史、「細川夫人自裁ノ實況」史學會雜誌、外交史稿、通航一覽、蘭學事始、

洋學年表。

○昔時歐米ニ赴キタル日本人。〔天文年中日本人羅馬ニ至ル〕Hildreth's "Japan as it was and is." 日本四教史。〔大友、大村、有馬云々〕外蕃通書通航一覽、歐南遣使考、外交志稿、日本四教史、明治廿一年七月十日及九年七月三日日々新聞、大村家秘錄、大村口碑等。〔蒲生氏郷云々〕蒲生家記、日本外史補、想古錄、等。〔德川家康大船云々〕中古外交志、慶長見聞錄、增訂采覽異言等、其他文中ニ記ス。〔伊達政宗其臣支倉六右衛門云々〕古文書、歐南遣使考、補綴金城秘傳、中古外交志所引貞享松平陸奥守書上、日本耶穌教記、日本四教史、歐米回覽實記、史學會雜誌第二、明治九年七月三日東京日々新聞、(十符之管簾)Hildreth's "Japan as it was and is." 等。〔德川秀忠及ヒ島津義久云々〕通航一覽所引老談一言記、明瓦洪範、德川十五代記。〔鎖國時代云々〕廿五年十一月毎日新聞、司馬江漢傳、等。〔金忠輔云々〕金忠輔傳、會餘錄等。〔錢屋五兵衛云々〕錢屋五兵衛傳、通航一覽續輯、(ダニール・ウエプスター)ノ公書。〔以上列記云々〕秋篠丈人墓表、萬次郎漂流紀事、嘉永明治年間錄。

○亞米利加州云々。(イ)ウエガー號北航記事。加奈太小志(東邦協會報告)、(ロ)邊海分界、世界地誌、萬國地名辭書二種。

○第二部 日本ト西南洋諸國トノ交渉。

○交通事歴。(イ)日本書紀、通航一覽、外交志稿(外務省編)、東邦協會報告等。

○近古西南洋交通貿易云々。長崎集覽、中古外交志、地學協會報告(通航一覽(幕府撰)、等。〔貿易物品〕延寶長崎記、中古外交志。〔安南國トノ交渉〕外蕃通書(近藤守重)、中古外交志、等。(イ)(ロ)怪當文集、〔柬埔寨國トノ交渉〕外蕃通書、異國日記(僧崇傳)、等。〔呂宗トノ交渉〕三世紀前日本ト菲律賓群島トノ交渉紀事(歐文)、外蕃通書、中古外交志、菲律賓群島日本人(福本誠)、"Isols Travels in Philippines-1875" 暹羅國トノ交渉(中古外交志、暹羅紀行(大島圭介等)、等。〔媽港トノ交渉〕異國日記、東邦協會報告、德川十五代史(內藤趾忠)、外交志稿等。〔國外渡航ノ禁止(中古外交志、外交志稿等)密商云々〕十五代史、明治十八年八月七日官報。

○大洋諸島ニ於ケル日本人云々。〔琉球征略〕琉球事件(渡邊氏)、德川十五代史。(イ)日本地誌提要(官版)、(ロ)沖繩志(伊地知貞馨)、史學會雜誌廿三、南島志。〔小笠原島ノ發見〕小笠原島要覽、八丈島年代記、德川十五代史等。〔無量壽寺僧云々〕靈社遺厄小記、開國起原。〔アラム島ト日本民族〕アラム島實驗誌、(地學協會報告)等。〔布哇島ト東洋人〕(ニ)臺灣水路誌、(海軍省譯)(ホ)アラム島實驗誌。〔臺灣島ト日本國〕平戸石碑文、(ハ)臺灣支那管轄史(地學協會報告)、(ト)「ヌメノホー」亞細亞地誌略、(チ)香港刊行 China Review、(リ)臺灣府誌、(ニ)東邦協會報告、(ハ)臺灣島實踐錄、(カ)クラント將軍隨員ヤング氏筆記、(カ)元老院履歷書。〔媽港、呂宋等ノ地方ト日本人〕外交志稿、西洋紀聞(新井白石)、群島日本人。

○南洋及ヒ印度ニ往キ云々。〔高岳親王云々〕三代實錄、扶桑略記、大日本史皇子傳ノ註所引和

漢合運(東大寺僧源然)。外交志稿所引元亨釋書。〔始テ印度ノ臥亞ニ赴キ云々〕(イ)歐南遣使考(太政官版)、洋學年表(大槻)、工藝志料、等。〔原田孫七郎云々〕日本四教史(佛人クラセ)、群島日本人、東邦協會報告第二。〔呂宋助左衛門云々〕堺鑑、堺大安寺記録。〔松倉重政云々〕外交志稿所引松倉家傳、野史纂略、昭代記、群島日本人等。〔津田又左衛門云々〕長崎志(田邊茂啓)。〔山田長政云々〕文中ニ記ス。〔安南貿易ニ從事云々〕安南記、日本之光輝、外交志稿所引荒木家傳、通航一覽等。〔天竺德兵衛云々〕米澤德兵衛上申書(渡天物語)、朱印船之記(兼松某)。〔濱田彌兵衛云々〕文中ニ記ス。〔南洋ニ至リ學術云々〕外交志稿所引長崎先民傳等。想古錄(山田某)。

○第三部 日本人ト亞細亞大陸東部トノ交渉。

○古昔邦人黑龍江云々。〔岡倍比羅夫云々〕日本書紀、岡倍臣蝦夷征略考(北海道在任永田某。地學協會報告)、續日本紀、大日本史所引宇治拾遺物語。〔源義經云々〕文中ニ記ス。

○北隣露西亞云々。〔露人東使事略〕露國史、東邦協會報告、外交志稿所引四書、等。〔間宮林藏云々〕東疆紀行、開國起原、等。〔高田屋嘉兵衛云々〕高田屋嘉兵衛傳(兵庫縣編)、遭厄日本紀事(イロニーノ原著、高橋景保譯)、『Hildreth's Japan as it was and is. 〔露國ニ至リシ日本人云々〕外交志稿、增田甲齋小傳(廿五年五月讀賣新聞)、千島志、等。

○綜結 『國庫剩餘金云々』廿四年九月十八日經世新報第五號。『植民協會云々』榎本武揚演說(植民協會報告)。『獨逸ノ上流社會云々』米歐回覽實記。

明治二十六年六月二十六日增補再版印刷
同 年同月三十日發行

定價書圓廿五錢



發行者 東京市京橋區彌左衛門町七番地 經濟雜誌社

右代表者 假持主 東京市神田區猿樂町十一番地 鹽島仁吉

印刷者 東京市京橋區西紺屋町廿六七番地 秀英會員 山本 鉄次郎

印刷所 東京市京橋區西紺屋町廿六七番地 秀英會 舍

東京市京橋區彌左衛門町七番地

發賣所 經濟雜誌社

渡邊氏著譯書目

- ◎日本外交始末
- ◎日本近代紀事二冊
- ◎明治開化史 本編 二編 三編
- ◎日本人民
- ◎民情如何
- ◎大政家ラッパ虞拉士頓フラストン立身傳 附英國時事二冊

- ◎日奔經濟初學三冊
- ◎紙幣要論二冊
- ◎實用商業書
- ◎文明就業案内 少年
- ◎致富叢談
- ◎世界實事奇談
- ◎西洋女範

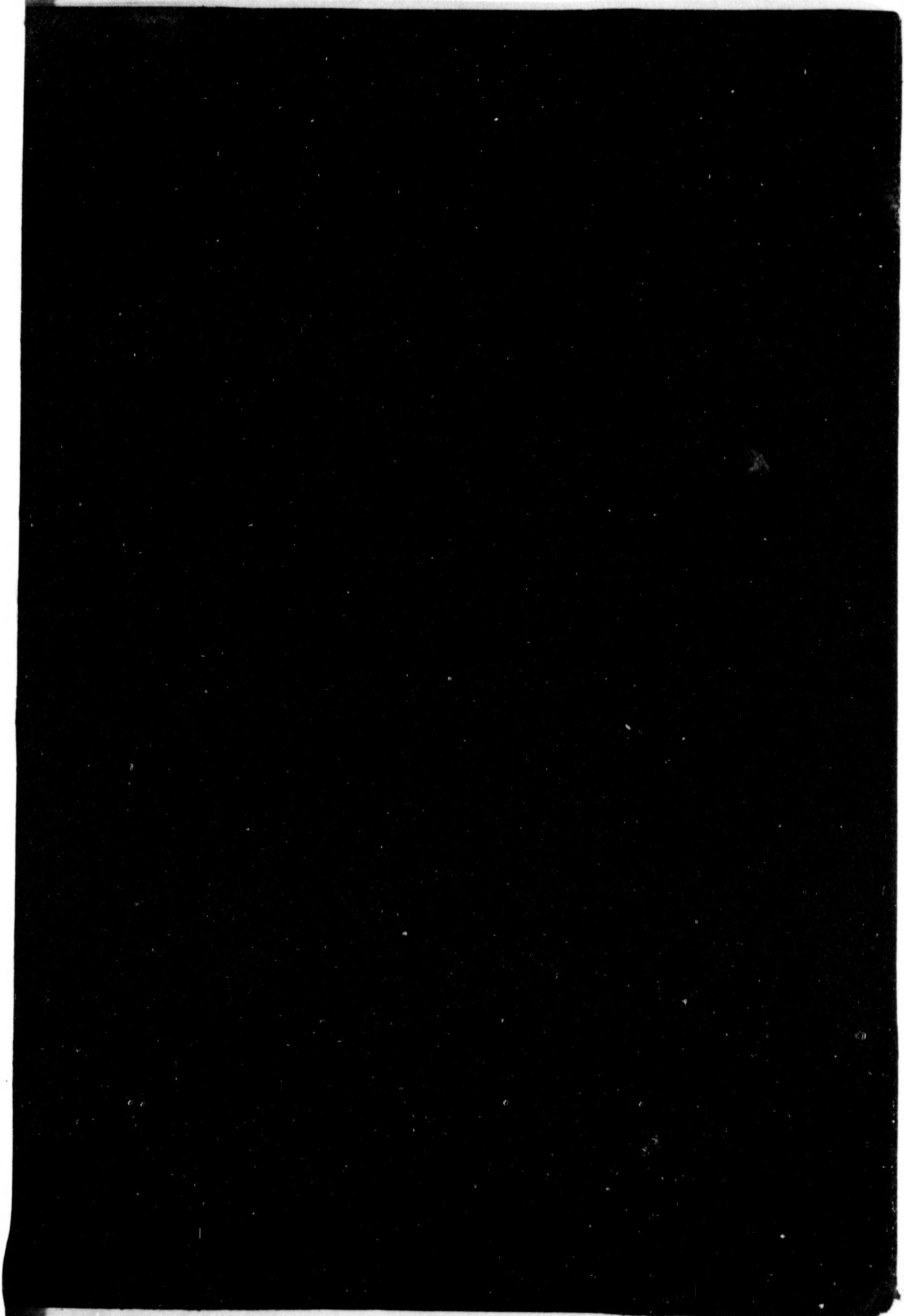
- ◎琉球事件
- ◎歐國會討論軌範 附 內政黨沿革
- ◎政事經濟備考
- ◎政界事實
- ◎社會之難題 ヘンリー・ジョージ氏
- ◎西洋才女傳 (凡二十人)
- ◎花蝶物語 (歐洲小說)
- ◎鈍喜翁奇行傳 セルバンテス氏

賣捌所

- 東京市日本橋區通三丁目 丸屋善七
- 同 日本橋區本町三丁目 瑞穂屋卯三郎
- 同 日本橋區通一丁目 大倉孫兵衛
- 同 京橋區南傳馬町二丁目 穴山篤太郎

石人印 甲五
甲五印 乙社

NANYODO BOOK-STORE
MOTOMACHI HONGO
TOKYO
店本堂陽南



Ⓜ

000719-000-2

210, 18-W82 s (h2)

世界ニ於ケル日本人

渡辺 修二郎/著

M26

ACB-1584

